

42604

教科書文庫

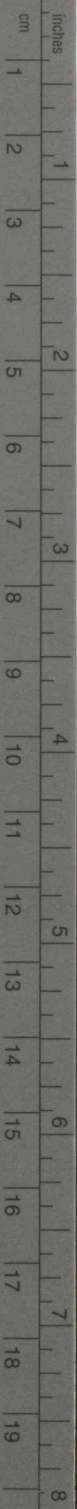
4
810
51-1925
200030/851

Kodak Gray Scale



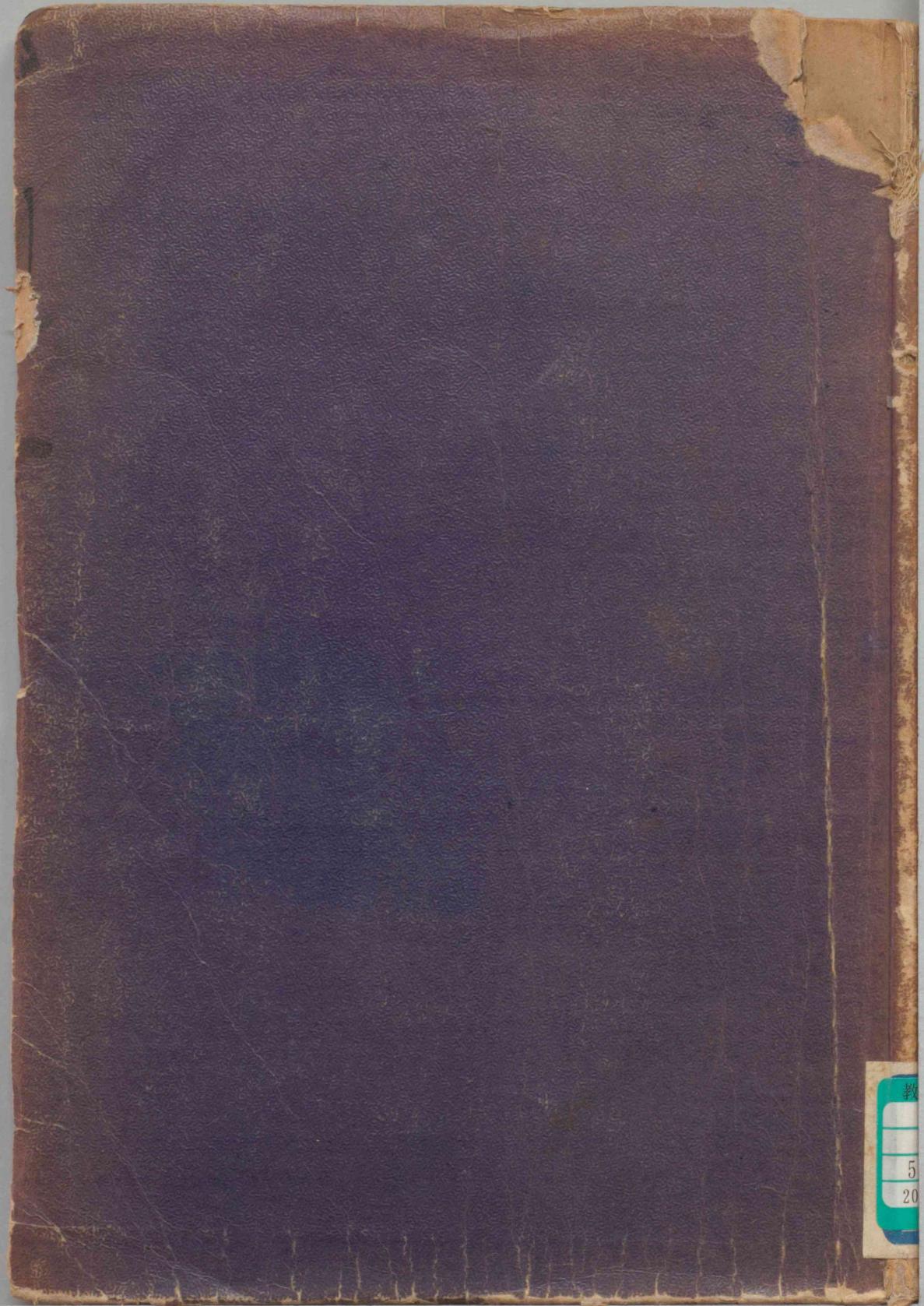
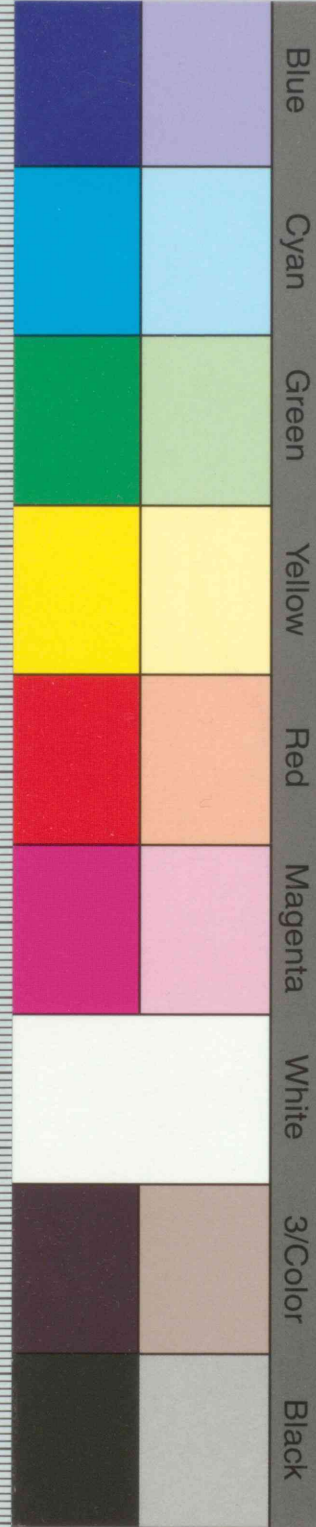
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料

教科書文庫
4
810
51-1925
2000301851

375.9

Ka9

日二十二月一年四正大
濟定檢省部文
用科語國校學範師

師垣
國文
新選

內松三編

広島大学図書

2000301851



社會式株
院書治明

- 一 縦に學年を貫き横に學期に互りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。
- 一 小學國定讀本の研究と聯關して學習と應用との融合を圖れり。
- 一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。



目次

一 文章の道……………島崎藤村……………一

二 保津川下り……………夏目漱石……………六

三 煙 霞……………近松秋江……………一五

四 日野山の奥……………鴨 長 明……………二六

五 汽車に乗りて……………上 田 敏……………三三

六 春四題……………吉村冬彦……………三五

七 俳句抄……………四

八 緑の群象彫刻……………上原敬二……………四

九 落花の雪……………(太平記)……………五

一〇 東路の旅……………(東關紀行)……………五

一一 いざよふ月……………阿 佛 尼……………六一

一二 富士の裾野……………若山牧水……………六七

一三 平家物語抄……………(平家物語)……………六二

一四 三右衛門の罪……………芥川龍之介……………九七

一五 短歌抄……………一五

一六 鉛筆日鈔……………長 塚 節……………二八

一七 丘の上……………吉江喬松……………三三

一八 塔 影……………河井醉茗……………三九

一九 小品三章……………一四三

二〇 夜學……………中島廣足……………四三

二一 蟲の音……………石川依平……………四四

二二 搗衣を聞く……………清水濱臣……………四四

- 二〇 霧の倫敦……………野口米次郎…二四
- 二一 ローレライの巖……………(傳説のライン)…二五
- 二二 鳴咽……………加藤武雄…二五
- 二三 苦行者と蛙……………佐藤春夫…二九
- 二四 徒然草四題……………吉田兼好…二〇〇
- 二五 鞭打つ者、鞭打たる者……………吉田絃二郎…二〇四

附録

尋常 國語讀本教材研究(その三) 新出漢字一覽表

小學



水曜、水金曜。

人々の下り上り

名は春樹。文學者。

信州、洋行

本號、信州、洋行、水曜、水金曜、

師範國文新選卷三

一 文章の道

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験の無かつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通うたうちに向の河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更にまた一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃に、よくも分らなかつた水瀬の速い遅いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと温いとも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつす

る他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出来た。板子無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行けるところ迄は自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか／＼容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違無い。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難く無いに相違無い。

二

吾姓の甲にある言

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼

甲矢
乙矢
一

逆切れ
に存る文

掘ル名詞
掘ル名詞

む自信、樂いことむところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして幸に當つた矢は高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ姿勢を正すことを私達に教へて呉れた。それからの私達の矢は假令的を貫くことが出来ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所に行くやうになつた。これは文章の道にも當籤めて見るべきが出来る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、さうしても先づ自己から正してかゝらねばならない。

三

(漸進法)

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鋤をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇

りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根白菜茄子豌豆胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、肥料をかけた。行つた。馬鈴薯の花が白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見る。さばや圓いのが幾つも幾つも根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には、嫩く生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたところを、今でも能く思ひ出すことが出来る。われわれが文章の手本とすべきものは、何程われわれの周圍にあつて

も、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。試みるといふことは、悟るといふことの初である。

四

淺草の新片町に住んだ頃家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界限を漕廻つたところがある。最初のうちは無暗に手足を動かす、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手許に引きし、て骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少なくて、身體全體の力で、ゆつくりと櫓を押し、そこが出来るやうになつた。向から大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうに、さう思つて漕いで行く樂なども、それから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある、簡素の美がある。文章の

道にも、無暗に筆を弄するこゝが決して自己の眞の表白とは成らない。

眞に好い文章には眞まことに好い結晶の力がある。(飯倉だより)

二 保津川下り

夏目漱石

浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より二條に引返す。引返さぬは、山を貫いて丹波に抜ける。二人は丹波行の切符を買つて、龜岡カメ岡に降りた。保津川の急湍タムは此の驛より下る掟オキテである。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて碧油の趣をなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆ツクシも生える。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。
「妙な舟だな。」と宗近君が云ふ。底は一枚板の平かに、舷フタヘは尺と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を轉がして、二人はよき程の間隔に座を占める。

京都府にある大堰川上流の稱。
名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。
京都府葛野郡。
京都府南桑田郡。

「左へ寄つて居やはつたら、大丈夫ぞす。波はかゝりまへん。」と船頭が云ふ。船頭の數は四人である。眞先なるは、二間の竹竿續く二人は右側に權カサ左サに立つは同じく竿である。

ぎい／＼と權が鳴る。荒削りに平げたる檣の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむんづと握る便りである。握る手の節の隆きは、眞黒きは、松の小枝に青筋を立てて、うんと搔く力の脈を通はせた様に見える。藤蔓に頸根を抑へられた權が、搔く毎に撓ユカリりでもする事か、強き項ウケを眞直まことに立てた儘藤蔓と擦れ、舷と擦れる。權は一搔毎にぎい／＼と鳴る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停る暇なきに、前へ前へと送る。重る水の蹙ヒツつて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀬

は是からである。

「愈來たぜ。」と宗近君は船頭の體を透かして岩と岩の逼る間を半町の向に見る。水はごうご鳴る。

「成程。」と甲野さんが舷から首を出した時、船ははや瀬の中に滑り込んだ。右側の二人はすはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳カクドモに立つ船毛は竿を横たへた儘である。傾いて矢の如く下る船はご、ご刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壊れるなと氣が附いた時は、もう走る瀬を脱け出してゐた。

「あれだ。」と宗近君が指さす後を見る。白い泡が一町ばかり逆落しに嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を萬顆まごつぶの珠と我勝ちに奪ひ合つてゐる。

「壯なものだ。」と宗近君は大に御意に入つた。門の前の岩に二人が「夢窓國師とごつちがい。」と云ふのを聞き、二人は

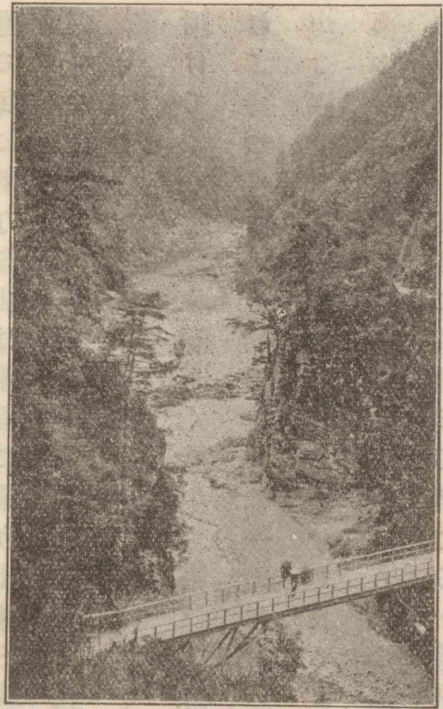
* 疎石と稱す。禪宗の高僧。正平六年歿、年七十六。

「夢窓國師より此方の方がえらい様だ。」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の落ちんとして、落ちざるを苦にせぬ様に、櫂を動かし來り、棹を操り去る。通る瀬は様々に廻る。毎に新なる山は當面まへに躍り出す。石山・松山・雜木山と數ふる遑はたを行客に許さざる疾き流は、船を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな圓い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に撃附けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、緑崩きりる、真中に舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途に此の大岩を目懸けて突きかかる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向は見えず、削られて坂と落つる川底の深さは幾段か。乗る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突當つて碎けるか。捲込まれて見えぬ彼方に、ごつと落ちて行くか。――舟は只まごもに進む。

「當るぜ。」と宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩ははやくも船頭の



黒い頭を壓して突つ立つた。船頭は「うん。」と舳に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢に、波を呑む岩の太腹に潜り込む。横たへた竿は取直されて、肩より高く兩の手が揚る。共に、舟はぐうと廻つた。此のコウケンシヤウ獸奴と突離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向へ落出した。

「どうしても夢窓國

師より上等だ。」と、宗近君は落ちながら云ふ。

急灘ウツヤを落盡くすと、向から空舟が上つてくる。竿も使はねば、權は無論の事である。岩角に突つ張つた懸命の拳を収めて、肩から斜に

盲縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根限り戻り舟を牽いて来る。水行く外に、尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に飛び、岩に這うて、穿く草鞋の滅り込む迄腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は、塞がれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかりである。うんと踏ん張る幾世キヤウセの金剛力キヤウリキに、岩は自然と擦滅つて、引懸けて行く足の裏を安々と受ける段々もある。長い竹を此處彼處と岩の上に、渡したのは、牽綱をわが勢に逆らはぬ程に疾く滑らす爲の策と云ふ。
「少しは穩かになつたね。」と、甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鉦ケツの音が丁々とする。黒い影は空高く動く。

「丸で猿だ。」と、宗近君は咽喉佛を突出して峰を見上げた。
「慣れると何でもするもんだね。」と、相手も手を翳して見る。
「あれで一日働いて幾らになるんだらう。」

「幾らになるかな。」

「下から聞いて見ようか。」

「此の流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべつに駛ハシつてゐる。所々にかう云ふ場所がないと、やはりいかんね。」

「おれは、もつと駛りたい。どうも、さつきの岩の腹を突いて曲つた時なんか、實に愉快だつた。願はくは船頭の竿を借りて、おれが船を廻したかつた。」

「君が廻せば、今頃は御互に成佛してゐる時分だ。」

「なに愉快だ。京人形を見てゐるより愉快ぢやないか。」

「自然は皆第一義第一義で活動してゐるからな。」

「するこ、自然は人間の御手本だね。」

「なに、人間が自然の御手本さ。」

「京人形はい、よ、あれは自然に近い。ある意味に於て第一義だ。困るのは……」

「困るのは何だ。」

「大抵困るぢやないか。」

「さう困つた日にや、方が附かない。御手本が無くなる譯だ。」

「瀬を下つて愉快だと云ふのは、御手本があるからさ。」

「おれにかい。」

「さうさ。」

「するこおれは第一義の人物だね。」

「瀬を下つてゐるうちは、第一義さ。」

「下つて仕舞へば凡人か。おや、〜。」

「自然が人間を翻譯する前に、人間が自然を翻譯するから、御手本はやつぱり人間にあるのさ。瀬を下つて壯快なのは、君の腹にある。」

壯快が第一義に活動して、自然に乘移るのだよ。それが第一義の翻譯で、第一義の解釋だ。」

「肝膽相照らすと云ふのは、御互に第一義が活動するからだらう。」

「まづそんなものに違ない。」

「君に肝膽相照らす場合があるかい。」

甲野さんは默然として、舟の底を見詰めた。言ふものは知らずと、

昔老子が説いた事がある。

「は、は、は、僕は保津川と肝膽相照らした譯だ。愉快々々」と、宗近君は二たび三たび手を敲く。

亂れ起る岩石を左右に繋る流は、抱くが如く、そこ割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて、岩角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山です。」と、長い竿を舷のうちへ挿込んだ船頭

(一) 知者不言、言者不知。
(二) 周の賢人。道家の祖。

(三) 本名は徳田浩司。文學者。早稻田大學出身。

が云ふ。鳴る櫂に送られて深い淵を滑る様に脱け出すと、左右の岩が自ら開いて、舟は大慈閣の下に着いた。(廣美人草)

三 煙霞

近松 秋江

清い水の澱み流れてゐるあの宇治川べりの茶畑や麥畑にもうそろそろ、螢の出をめる五月の末であつた。昨夜大阪から着いてこのこある旅館に一泊した私は、久し振に好きな鱈やその他の味の浅い清鮮な川魚料理を食べながら、この地の風物にはいつよりも最も好適な晩春初夏の氣分に浸つて、夜の物にも薫る爽かな若葉の匂をかぎながら一夜を明かした。昨日の晝頃から稍嵐立つてゐた陽氣が、夜に入つてその風が落ちてしまふと、寝る時分から青葉に降りそ、ぐ静かな雨の音が聞えてゐた。翌朝遅く眼を覺す、五月雨模様あまごゑの空は薄黒く曇つて、ところどころに雲の切れ目から明

白雨映 雲山

煙霞遠近 鹿戸

るい日の光が洩れてゐるのに、白雨の脚が對岸の興聖寺の藁やその背後に聳えた朝日山の青葉を濡してゐるのが、開け放つた窓から遠く見えてゐた。時をずらすと雨はそれらの前景を悉く搔煙らし、てその前を漲り流れてゐる川の上まで、煙霞の蔽ひかゝつてくる。ここがあつた。

私はそれらの風景を飽かず眺めながら食事を済ますと、俵を命じて降つたり止んだりする雨の中を立つていつた。そして宇治驛から汽車で奈良の方を廻つてゆくことにした。新田長池、玉水、棚倉、上狗、木津川に沿うた南山城の驛々を通つてくると、藪も畑も降る雨に濡れて、油のやうな艶やかな翠緑が滴つて流れるかと思ふばかりに、見る物悉く深い緑の一角に塗りばかされてゐた。鐵橋を渡りながら眼を放つと、長い藪疊の岸を洗ひつゝ、清い砂ばかりで川床の出來た木津の清流が、遠く賀茂笠置の方の雨に煙つた山と

山との峽間を流れて來てゐる。やがて木津の停車場につく。こゝは伊賀、大和、山城の國境から流れ出て、今まで西に向つて流れてゐた木津川が、そこから急に右折して南山城の平野を北流しつゝ、灌漑してゆく、その曲折點になつてゐる上に、伊賀街道と奈良と京都との交通の交叉點に當つてゐるので、可なり殷賑な市邑である。また大和、山城に境する山岳地方と山城、河内に續く廣濶たる平野との境界地點に當つてゐる一つの水郷でもある。

汽車の窓から顔を出して西の方を眺めると、雨氣を含んだ深緑の野が、やゝ傾斜面をなして遠く展げ、その野末の果てには河内と大和との境に跨がる生駒續きの山々が、水墨を潑した如く、さみだれ空の雲の表に丁度真鯉の背のやうに黒く浮出てゐた。そのうち雨雲は漸々薄れていつて、明るい太陽の光線が雲の切れ目から縞のやうに放射して來ると、生駒の姿は一はいに明るい日の色を浴

びて、ふつくりとした山の輪郭の處だけ、まるで黄金の縁まちを付けたやうに華やかな金色に輝いて、此方に面した山の肌は淡藍色にぼうつと煙つてゐる。汽車が奈良の方に近づいてゆくにつれて、山の姿はいろ／＼な色彩に變化を呈して來た。私はこの時奈良驛驛に下車して博物館などを窺いて見ようかと思つたが、法隆寺までの切符を買つてゐたので、そこまで續けて乗ることにした。汽車が郡山を通り越して大和平野の中心を駛せてゐる時、振返つて奈良の方を見るに、ちやうど春日山、三笠山の上あたりの空が墨を流したやうに眞黒に曇つてゐる。先刻木津から奈良への途中で、生駒山から南山城と北河内の境に連つ互つしてゐる龍王レウワウ・天王テンワウ・國見クニミ・觀音クワンオンの諸山脈にかけて見えてゐた夕立雲が、少時の間に今度はそつちの方へ廻つていつたものと知れた。

その眞暗な空の色を背景にして、奈良の山はそれがために一層

明るく間近に浮出て見えた。そして大佛殿や興福寺や新薬師寺あたりの均整を保つた堂宇の屋根の靜かに立つてゐるのが、可なり距離を置いて繪畫のやうに眺められた。大佛殿の大きな屋根の鴟尾トウビが、目を受けて金色に光つてゐる。野にはもう麥が黄色く熟しかけて、遠くの平野から渡つて來る爽かな五月の軟風が、車窓に向けた顔を撫でていつた。

やがて田圃の中に立つてゐる法隆寺の停車場について、汽車を下りるに、そこから俣を雇うて法隆寺の村まで麥圃の間の田舎道を行つた。東北の奈良の方の山には、尙黒い雲を着けて、軟らかな微風の薫る間々に、忽ち嵐のやうな強い風が麥圃に波を揚げていつた。私は軽い麥藁帽子をこられないやうに、周章しゅうしょうてて手で抑へた。眼も霞むまで廣く開展した野の果てには、遠く西方に葛城カキ・金剛キョウの山の巖いわが眺められた。今年も亦五月の空を慕うて歸つて來た燕

が輕快な翼に風を切つて俣の前路を地上に附くかと思ふほど低く翔つていつた。道の傍では暖く微温んだ麥圃の間の野溝を濡干ほしして、里の子供等が尻を捲つて鮒や鱒を捕つてゐた。やがて俣は靜かな法隆寺の村に入つていつた。そこには北畠何房あつたなどといふ土地の豪族の嚴めしい屋敷が、廣い堀を取りまはして立つてゐた。そんなものを見た私の聯想は、五六百年も昔の南北朝時代に駛せていつた。伊勢から此の邊りにかけては、北畠の一族殘黨が長く南朝の帝のために誠忠を盡くしてゐた地方であつた。

村を通り越す寺の境そこには老松の鬱蒼として立並んだ清い砂地の道路が寺域に續いてゐる。やがて南大門に入つてゆく、南側に古めかしい土堀の立つた彼方に仁王門が見えて、その左の臺のはづれに、名にしおふ五重塔の輪塔佛の靈城をなごめる。が高くあらはれてゐる。建築美術の知識に疎い私は、専門家の立場から分析的に觀察することは出

不思議
議に注意せよ

來ないが、秀麗無比なる五重塔や金堂の様式をぶつとして見入つてゐるうちに、名狀し難き一種の藝術的快感が湧いて來るのを覺えた。この五重塔や金堂の端麗宏壯なる姿態を仰ぎ見る者は、あの奈良西の京薬師寺にある紫銅の鑄造佛、薬師如来と左右の脇士日光菩薩、月光菩薩、三尊の立派なる佛體をも聯想せずにはゐられないであらうと思ふ。今を去ること千數百年の昔、聖德太子や聖武帝の時代に、既に斯の如き進歩したる工藝美術が日本に出來たかと思ふと、寧ろ不思議なやうな氣がする。五重塔や金堂の莊嚴端麗なる建築美の快感にしばし恍惚の境に耽溺してゐた私は、エドワのレトリックやがて眼覺める如く我にかへると又砂地を歩んで、清淨閑寂を極めたその法隆寺の寺域を、また南大門の方へと出て來た。葛城金剛の巨大な翠巒は、先刻と變らず遠く綠麥の野の果てから、絶えずそよそよと薰風を吹送つてゐる。

法隆寺驛から少し南に行くと、官幣大社廣瀨神社がある。驛前の田圃の畦に丹塗の角杭が立つてゐて、その道しるべをしてゐる。私は驛前の茶屋に立寄り、赤毛布を掛けた休み臺に腰打ちかけつゝ、際涯さいげもない五月晴の野景色をいつまでも顧望してゐた。

茶店の女房は奥のひと間で夜具に綿を入れてゐたが、立つて來て煙草盆に火を入れたり、茶を汲んだりしてくれた。邊りの野には蓮華草の名残が尙處々に點々紅紫の色を留めてゐるばかりで、一面に畦から畦に眞青な草の葉を茂らしてゐる。日は麗カゲロウかに照り、田圃に續く村々の屋根は煙霞の中にちら／＼と陽炎カゲロウを立ててゐる。私は有合せの夏蜜柑に渴を醫しながら、さてこれから何處へ行かうかと考へた。實に大和の此の邊りほど何處へいつても見るべき名所に富んでゐる處はない。そして其等の名邑を連接する交通機關は、縦横に往き交うてゐるのである。新法隆寺驛から二階堂を

經て丹波市に出ると、そこには有名な天理教の本部がある。此處も一度見ておいてもいい。そして其處から奈良方面より來る汽車に乗つて更に南するに、やがて古い三輪の町にゆく。そこには官幣大社おほみこ大神神社立たせたまふ。三輪山近く聳え、鬱蒼たる杉檜の美あり、而も三輪の茶屋といつて、近松翁の作にもあらはれて來る所で、今も尙參宮街道の茶屋の残つてゐることは事實である。それは以前畿内地方から伊勢參宮の順路に當り、此處を經てゆく者が多かつたその名残である。今は多く頽廢たふさして、往昔の殷賑のさまは無いけれども、なほ昔を偲ぶことが出来る。

そこから櫻井町を經て、尙少許南へ行くに、多武峰トウブミヤに藤原鎌足を祀る官幣大社談山神社がある。その少し西北には畝傍ムナサカ・耳成ミナナシ・香久山の天和三山がある。櫻井より汽車で東するに、二里ばかりにして、初瀬に有名なる長谷觀音がある。

(一) とくくと落つる岩間の苔清水汲干すほごもなき住居かな(西行法師)
 (二) 露とくくとくろみに浮世すゝがばや(芭蕉)
 (三) 妹背山婦女庭訓。三好松洛。近

三輪初瀬このわたりの鄙ヒナシびた旅籠茶屋ハルカケヤに轉々として、肌に適する初袷の裾も軽く、ぶらくとさまようて、それからその邊りに飽きると、又汽車で西へいつて高田の町まで戻り、そこから御所町吉野口を経て吉野川の上流に沿ひつゝ、上市の町まで行くとすれば、そこから南朝二代の帝の籠らせたまうた吉野の宮居の跡は直ぐである。もう五月の末だから花は疾うに散つて、徒に葉櫻の繁つてゐるばかりであらうが、なまなか花のころは却て騒々しいばかりである。南朝の往事を偲びまゐらせ、または西行芭蕉の隱棲のあとを探ね、とくくと露を汲んで詩聖達の幽魂オモイシと物語るには、なかなかに此の青葉の季節こそ好ましい。ましてやがて五月雨のつゞく頃は、もう間近にせまつてゐる。吉野川の雨景も眺めたい。妹背山イモセにその名の知られた妹背山の間を分けて川上の方から下してくる筏の、雨に濡れそぼつてゐるのも風情オモイシに富んでゐる。上市の町こそ

この邊やせ
 秋とれ

松平二等の合作に成れる戯曲。

暫く停車するに好い土地である。そしてやがて瀬々の水ハシエに若鮎ワカサギの跳るころになると、満溪の翠緑は眞に滴り流れるかの如き清爽な感を呈するであらう。

私は法隆寺驛の茶店の臺に腰掛けながら、そんなことを種々空想してゐた。やがて長い五月の一日もやゝ西に傾きそめて、華やかに大和平野の野末に照り輝いてゐた太陽は、丁度生駒山の北の方に沈んでゆかうとしてゐた。丁度その彼方に大阪の大きな市街は擴つてゐるのである。私は明るい燈火の瞬くその街のさまざまなを思ひ描いてゐた。

やがて又私は眼に見えぬ或魔力に引寄せられるやうな氣持になつて、法隆寺驛から汽車に乗つた。湊町の停車場に着いたのは、軒軒に明るい燈火の瞬きはじめる頃であつた。(秋江隨筆)

四 日野山の奥

鴨 長 明

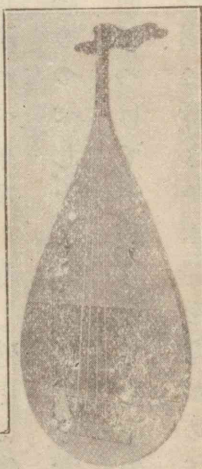
(一) 京都府宇治郡。
(二) 山城國賀茂社の氏人。和歌・管絃をよくし、後鳥羽院に寵せられて和歌所寄人となる。後、難波して漢胤と改名し、洛外の山中に通世す。

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやごりを結べる
ことあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいと
なむが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が一に
だにも及ばず。ごかくいふほどに齡は年々にかたぶき、住家は折々
に狭し。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方丈、高さは七
尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組
み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけたなり。もし心に適はぬこと
あらば、易く外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾ばくの煩かあ
る。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、さらに他の用
途いらす。

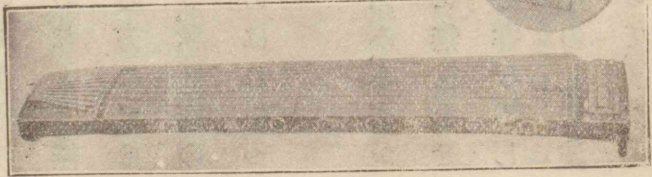
いま日野山の奥に迹をかくして、後南に假の目がくしをさし出
して、竹の簀子を敷き、その西に關伽棚を作り、うちには西の垣に沿

(三) 六卷。源信僧都の著。淨土念佛に歸依すべきことと勸めたるもの。

へて阿彌陀の畫像を安置し
奉りて、落日を受けて眉間の
光とす。かの帳の扉に、普賢な
らびに不動の像を掛けたり。



北の障子の上にはちひさき棚をかまへて、黒き皮籠
三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集、ごこさ
の抄物を入れたり。かたはらに箏琵琶おのゝ一
張を立つ。いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東にそ
へて蕨のほごろを敷き、つかなみを敷きて夜の床
ごす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。
枕のかたにすびつあり。これを柴折りくぶるよし
がとす。庵の北に少地を占めて、あばらなる姫垣をかこひて圍ごす。
すなはちもろくの藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくのこ



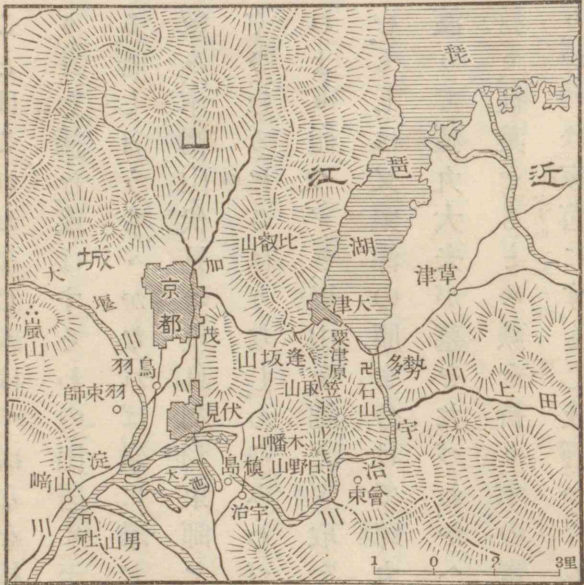
箏 折 と 琶 琵

(一) 世の中を何にたとへむあさばらけこぎゆく舟のあとの白浪(沙彌滿誓、拾遺集)
 (二) 京都府紀伊郡
 (三) 滿誓沙彌。右大辨笠麻呂。養老五年出家。

ごし。
 その處のさまをいはば南に寛あり岩をたゝみて水を溜めたり。林軒近ければつま木を拾ふに乏しからず。名を外山（外山といふ正木の）かづら迹をうづめり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲のごとくして西の方ににほふ。夏は時鳥を聴く。かたらふごこに死出の山路をちぎる。秋は蝸の聲耳に満てり。空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。
 もし念佛も（大念ふこと）のうく讀經まめならざる時はみづから休みみづから怠るに妨ぐる人もなく。また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれどもひとり居れば口業修めつべし。かならず禁戒を守るごしもなければ境界なければ何につけてか破らむ。もし迹のしら波（波を寄するしる波）に身を寄するあしたには岡の屋に行きかふ船をながめて滿沙彌

(四) 潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟々。(白樂天の琵琶行)
 (五) 桂大納言源經信。琵琶の右手。承徳元年歿、年八十二。
 (六)(七) とともに琵琶の曲名。

が風情をぬすみもし桂の風葉をならす夕には潯陽の江をおもひ遣りて源都督のながれをならふ。若しあまりの興（白樂天詩）ある時はしばしば松のひびきに秋風の樂をたぐへ。水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれど、人の耳をよるこぼしめむごにもあらず。ひこりしらべ、ひとり詠じてみづから心を養ふばかりなり。



りてあひ訪ふ。若しつれづなる時は、これを友として遊びありく。

(1) 京都府紀伊郡
 (2) 京都府乙訓郡
 (3) 京都府宇治郡
 (4) 滋賀縣滋賀郡正法寺の觀音。
 (5) 同郡石山寺の觀音。
 (6) 平安朝初期の歌人。
 (7) 滋賀縣宇治郡。
 (8) 山鳥のほろく
 (9) となく聲きけば
 (10) 父かと思ふ母かと思ふ。(僧行基、玉葉集)

かれは十六歳、われは六十。その齡ことの外なれど、心をなぐさむることは、これおなじ。或はつばなを抜き、岩なしを採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田居に至りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、はるかに故郷の空を望み、木幡山(1)、伏見の里鳥羽(2)、羽束師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて、蟬丸の翁が迹をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓をたづね、かへるさには、をりにつけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家苞(3)にすも、し夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く、眞木(4)の島のかぶり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥(5)のほろくくと

(1) 山ふかみなる、かせぎのけちかきに世に遠ざかるほぞ知らる。(西行法師、山家集)
 (2) 山深みけちかき鳥の音はせで物おそろしきふるふの聲。(西行法師、山家集)

鳴くを聞きても、父か母かどうたがひ、峯(1)のかせぎの近く、馴れたるにつけても、世に遠ざかるほぞを知る。或は埋火(2)を掻きおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。
 大かたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五こせを経たり。假の庵もや、古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。まして數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。たぐひの炎上に亡びたる家、又いくそばくぞ。たぐひ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

(方丈記)

※ 文學博士。大正
五年歿、年四十
四。

五 汽車に乗りて

上* 田 敏

赤松の林をあとに、

麻島ひだりに見つゝ、

汽車はいま堤にかゝる。

ほのかなる水のにほひに、

河淀の近きは著し。

三稜草生ふる河原に、

葦切はけしと噪ぎ、

鶺鴒こそ夏は來らね、

たま〜に百舌の速贅、(木の板かきかき寝たりしてまきまき)

篋鷺の何をか思ふ。

しよんぼりと立てる暇に、

紡績の宿にやあらん、

きりはたりはたり、ちやうちやう。

箴の音や、にへだたり、

道祖神祭るあたりの

鐵道の踏切近く、

繩帶の襪褌の衣、

褐色は節磨の染の

乳呑子を負へる少女は、

淺茅生の末黒に立ちて、

萬歳と囃し送りぬ。

萬歳はなれにこそあれ、

幾年を生きよ、里の子。

人の世に尊きものは
 土の香ぞ、國の御魂ぞ。由是大りある
 偽の市に住まへば、
 産土ウラキの神に離りて、
 養をかきたる人も、
 埴安ニギハヤヒの郷の土より
 生えぬきのなれに呼ばれて、
 本然ほんぜんの命にかへる。

道芝の上吹く風よ、
 農人の寢覺に通ふ
 微かなる土のおとづれ、
 なつかしき母の聲音か。

*
 本名は寺田寅彦。
 東京帝國大學教
 授。理學博士。
 冬島集

晝さがり草の香高く、
 松脂のにはひもまじる
 地の胸の乳房のかをり、
 蘇門答刺スマタラの香も及ばじ。
 忽ちに鐵のにはひす。
 鳴神の落ちかゝるごと、
 汽車は今橋に轟く。
 桁がまへ、眼路をかぎりて、
 ひとり見る蛇籠へびかごの磔はり。(上田敏詩集)

六 春四題

一

吉村冬彦*

曆の上の春と氣候の春とは或意味では没交渉である。編曆を司る人々は例へば東京に於ける三月の平均温度が攝氏何度であるかを知らなくても、職務上少しも差支はない。北半球の春は南半球の秋であることだけを考へても、それは分るだらう。

春といふ言葉が正當な意味をもつのは、地球上でも温帶の一部に限られて居る。是は誰も知つては居るが實感して居ない事實である。

併し例へば東京なら東京といふ定まつた土地では、一年中の氣候の變化には自ら定まつた平均の經路がある。それが週期的乃至非週期的の異同の波によつて歳々の不同を示す。

此の平均温度と云ふものが往々誤解されるものである。ごうかすると、某月に其の温度の日が最も多いといふ意味に思ひ違へられるものである。併し實際は月の内で其の月の平均温度を示して

天文
物理

居た時間は極めて稀である。

致しち議論

それが事柄は別だが、所謂輿論とか衆議の結果といふやうなもの、が實際に多數の意見を代表するかごうか疑はしい場合が甚だ多いやうに思ふ。それから又志士や學者が云つて居るやうな「民衆」といふやうな人間は、搜して見ると存外容易に見付からない。餓に泣いて居る筈の細民が、ごうかすると初鰹魚を食つて太平樂を並べて居たり、縁日で盆栽をひやかして居る。

これも別の事であるが、流行或は最新流行といふ衣裳や粧飾品は、寧ろ極めて少數の人しか着けて居ない事を意味する。これも考へて見ると妙な事である。新しい思想や學說でも、それが多少廣く世間に行渡る頃には、もう流行はしない事になる。

二

春が來ると自然の生物界が急に賑やかになる。いろ／＼の花が

咲いたり、いろ／＼の蟲の卵が孵化する。氣候學者はかういふ現象の起つた時日を歳々に記録して居る。そのやうな記録は農業其の他に参考になる。

例へば或庭の或櫻の開花する日を調べて見る。勿論特別な歳もあるが、大概は或四五日位の範囲内にあるのが通例である。これは何でもないやうで随分不思議な事である。開花當時の氣温を調べて見ても、必ずしも一定して居ない。無論其の間際の數日の氣温の高低は可なりの影響をもつには相違ないが、それにしても此の現象を決定する因子原因は其の瞬間の氣象要素のみではなくて、遠く遡れば永い冬の間から初春へかけて一見活動の中止して居るやうに見える植物の内部に行はれて居た變化の積算したものが發現するものと考へられる。

そこへ行くに、人間などはだらしのないものである。仕事は忙し

かつたり、つい病氣したりして居る。いつの間にか柳が芽を吹いたり、櫻の荅たけの膨らむのを知らないで居て、急に氣が付いて驚く事がある。

うっかりして居る間に學年試験が眼の前に來て居たり、借金の返済期限が差迫つて居たりする。

眠つて居るやうな植物の細胞の内部に、ひそかに、併し確實に進行して居る春の準備を考へる。何だか恐しいやうな氣もする。

三

植物が生物である事は誰でも知つて居る。併しそれが「いきもの」である事は通例誰でも忘れて居る。

或日私は活動寫眞で菊の生長の状況を見せられたことがある。先づ映畫に現れたのは一つの小さな植木鉢であつた。其の眞中の土が妙に動くと思つて居る。さうさうと双葉が出て來た。それが見る

間に大きくなり、其の中心から新しい芽が泉の湧くやうに湧上り
 延上つた。延びるにしたがつて莖の周圍に簇生した葉は上下左右
 に奇妙な運動をして居る。それは恰も自意識のある動物が吾々に
 は不可知な或感情分らない感情を表すために跪ヒクイいて居るやうにも思はれ、或は
 又充實した生命の歡喜に躍つて居るやうにも思はれた。やがて莖
 の頂上にむくく、こ一つの團塊が盛りあがつたと思ふと、瞬く間
 に其の頭がばらばらに破れて、數十の花弁が花火のやうに放散し
 た。そして絶大な努力を仕遂げて喘ヒクイいででも居るやうに波打つて
 居た。そこで惜しい處で映畫はふつと消滅してしまつた。

私は何だか恐しいものを見たやうな氣がした。つまらない草花
 がみんないきものだといふ事を、これ程明白に見せつけられたの
 は初めてであつた。

日常見馴れた現象を、唯時間の尺度を變へて見せられただけの

事である。時の長短といふ事は勿論相對的な意味しかない。蜂の
 生涯も永劫エトコウであり、國民の歴史も刹那トキの現象である。朝生れ夕死すといふは、
 して私は此の活動映畫からこんなに強い衝動を感じたのだらう。
 吾々われわれがもつて居る生理的の「時」の尺度は、其の實は物の變化の「速
 度」の尺度である。萬象が停止すれば時の経過は無意味である。「時」が
 問題になる處には其處に變化が問題になる。四元世界の一つの軸
 としてのみ時間は存在する。

處が此の生理的の速度計は極めて感じの鈍いものである。或度
 以下の速度で行はれる變化は、變化として認める事が出来ない。是
 は又吾人が箇々の印象を把持する記憶の能力の薄弱な爲とも云
 はれよう。

忘却わすれといふ事がなかつたら記憶といふ事は成立たない。心理
 學者は云ふ。忘却といふものがなかつたら生きて居られない。詩

人は叫ぶ。

もし記憶の衰退率がどうにかなつて、時の尺度が狂つた爲に、植物の成長や運動が、私の見た活動寫眞のやうに見え出したらどうであらう。春先の植物界はどんなに恐しく物狂はしいものであらう。考へただけでも氣が違ひさうである。青い鳥の森の場面位の事ではあるまい。

四

日本の春は太平洋から来る。

或二階の縁側に立つて南から西の空に浮かぶ雲を眺めてゐた。上層の風は西から東へ流れて居るらしく、それが地形の影響を受けて上方に吹きあがる處には雲が出来て、其處に固定しへばりつゝいて居るらしかつた。磁石とコムパスで此等の雲の大凡の方角と高度を測つて、そして雲の高さを假定して算出した其の位置を地

※
メーテルリンク
作のお伽劇。

圖の上に當つて見るに、西は甲武信嶽から富士箱根伊豆の連山の上にかゝつた雲を一つく指摘する事が出来た。箱根の峠を越した後再び丹澤山・大山の影響で吹きあがる風は風色の厚味のある雲を醸して、それが旗のやうに斜に靡いて居た。南の方には相模半島から房總半島の山々の影響もそれと認められる様に思つた。

高層の風が空中に描き出した關東の地形圖を裏から見上げるのは不思議な見物であつた。其の雲の國に徂徠する天人の生活を夢想しながら、なほ遙かな南の地平線を眺めた時に、私の眼は豫想しなかつた或物にぶつかつた。

それは遙かな遙かな太平洋の上に蔽つて居る積雲の堤であつた。典型的なもくもく盛りあがつた圓い頭を並べて、隙間もなく並び立つて居た。都會の上に擴る濁つた空氣を透して見るので、それが妙な赤茶けた温かい色をして居た。それはもうどうしても冬

の雲ではなくて、春から夏の空を飾るべきものであつた。
 庭の日かげは未だ霜柱に閉ぢられて、隣の栗の樹の梢には灰色
 の寒い風が揺れて居るのに、南の沖の彼方からは、もう桃色の春の
 雲がこつそり頭を出して覗いて居るのであつた。
 こんな事を始めて氣付いて驚いて居る私の鼻の先に突出た楓
 の小枝の一つ一つの尖端には、ルビーやガーネットのやうに輝く
 新芽が、もう大分芽らしい形をしてふくらんで居た。(冬彦集)

七 俳句抄

一桶の藍流しけり春の川
 水草の花に觸れたる水棹かな
 秋來ぬと柱の拂子動きけり
 我が背戸に二百十日の茄子哉

子規
 同
 同
 同

正岡子規。名は常規。類祭書屋主人。竹之里人等の別號あり。明治三十五年歿、年三十六。

Garnet Ruby

紅玉。石榴石。

野分して上野の鶯の庭に来る
 雁の聲に蓮こぼれく破れたり
 柿喰へば鐘が鳴るなり法隆寺

同
 同
 同

七 俳句抄

蹟筆規子岡正

白魚のうまる、夜なり朧月
 燕や三十三間堂の雨
 夢殿の承塵にゐるよ雲の鳥
 大雪の海に消えこむ静けさよ
 元日や一系の天子富士の山
 竹割るや竹の中なる秋の水
 麥の秋盗人らしきもの通る

紫影
 酒竹
 青々
 小波
 鳴雪
 同
 碧梧桐

藤井紫影。名は乙男。文學博士。京都帝國大學教授。
 大野酒竹。名は豐太。醫師。大正二年歿、年四十四。
 松瀬青々。名は彌三郎。
 巖谷小波。名は季雄。
 内藤鳴雪。名は素行。
 河東碧梧桐。名は乘五郎。

(一) 佐々醒雪。名は政一。文學博士。大正六年歿。年四十六。
(二) 高濱虛子。名は清。

* 林學博士。東京帝國大學教授。

市中や鴉人を見る秋の暮
毒蛾やく煙の末や夏の月
海風々々汝成佛して何のほごけ(狂句)
音たてて春の潮の流れけり
大なる霞ころがりて縁に消えざる

運体形

同 醒雪
同 同
同 虚子

八 緑の群像彫刻

* 上原 敬二

我等の俱に戴く天の汚れなきと、我等の生を育む大地の美しさ
ごかうした環境に生を享けて、唯自分がこゝに生きて居ると云ふ
ことばかりでも、たまらない愉快の念のこみ上げて来るやうな生
き甲斐のある生活こそ望ましいものである。
ありあまる森林を自由貨物として人の採るに委せ、伐るに異議
を云ひたてなかつた古代に於て、森林美の問題にされる筈はなか

一 森林の美しい理由

二 森林の常人の人に
てもある。



森林美

つた。アフリカの蠻界に裸色を
誇る人種の間裸體の感觸が
鈍いのと何等擗ぶところはな
い。
自然美の内にあつて森林美
は正しくその覇者である。綜合
美である大地に曳く地被の優
美と、宇宙に輝く萬象の壯美と
を併せて、色にも形にも内容に
も最も複雑なる美を求めれば、
蓋し森林のそれであらうか。水
を得て景愈々潑刺たるものあり
雲を抽んで美益々深刻なるも

Goethe
獨逸の詩人
二七四九
一八三三

Monochrome
單彩畫

のあり、人に無限の感懐を起させるものがある。ゲーテの如き大詩人ならずとも、森林美耽溺の熱愛心をそゝられないものが果して幾人かあらう。

森林の美は之を組立てる要素の如何によつて様々に見られる。その主なるものは色彩形象聯想變化調和內容表現である。

これ等の内最も魅惑的で、變化の多いのは色彩によるものであらう。緑の群像彫刻と森林を讚へるのは、又至言である。色彩は樹冠・林冠・花冠の生長と開展とに伴なつて、時間的にそのモノクロームの色に變化を與へ、所謂新緑の美より始つて紅葉・落葉に至るまで、殆ど常に色を異にしつゝ、生長して居る。敏感なる耳の持主がオーケストラに聞惚れてその單音を識別し得るが如く、鋭い視神經を持つ人は、必ずやこの緑の混合層を幾つかの色圈に分つてあらうと思ふ。

三、美の最もすいれな時

Vista
列樹などの間の見通し。

新緑の美は早春より晩春を経て初夏に至り、一面には氣候の影響と他面には人心の感觸とを伴なつて、一年を通じて最も印象的なる樹木生長の周期的現象である。況や水に配し、霧に隠れ、加ふるに春愁之に聯想して益々その趣を深からしめる。形よりいへば、森林の上部空線の遠望、林冠線の曲折を始め、果ては幹の立ち様、林相の疎密、枝下の高下、さうして是等を通じて起る森林美には、所謂幹越しの景と云ふ透視景を初め、幻想を巧用せるヴァイスターの快林冠を上滑る俯瞰景、何れも森林作業上將た公園林經營上、無視することの出来ない所である。

森林美の研究は單に美そのものの研究ではないので、悉くその効果が經營上に及ぶのである。一つは純粹の營利本位の森林作業上、他は所謂森林の第三効用たる風致林若しくは公園林としての實を發揮せんが爲に用ひられる設計・經營・管理に屬する。

Gilpin
一七八〇
四

かゝる方面の研究は決して古くからあつたものではなく、千七百九十一年イギリスのニューフォレストのポーター地方に神の道を説いてゐた神學者ギルピンの手によつて初めて研究されたのが動機で、その不完全を補ひつゝ、今日に及び、遂にドイツ一流の研究法によつて大成されたのが近世の森林美學である。建築美學造園美學等と相並んで、自然美と人爲美との巧みなる折衷によつて應用美學の體系をなし得たと云へよう。

自然研究の漸く盛ならんとして居る今日、登山の氣運旺盛なる毎年の夏を迎へる度に、唯無意識にかゝる自然界を踏破することなく、あらゆる自然現象に觀察の眼を放ち、凝視の瞳を向けて、其の内に宿る神の攝理と造化の妙諦とを體得し、その表るゝ偉大なる自然美に心からの憧憬を致して、興味心と研究心との益旺に、自然愛着の念愈々深からんやうに心懸くべきであらう。(夏の科學)

北條高長辨代
小鳥法師

正平三上
右少辨藤原俊基
元弘元年

又やみむ交野の
みのの櫻が花
の露ちる春の
曙(藤原俊成、櫻の散り)
新古今集
朝まだき嵐の山
の寒ければ紅葉
の錦きぬ人ぞな
き(藤原公任、はな
の散り)
拾遺集
そより雪の綿

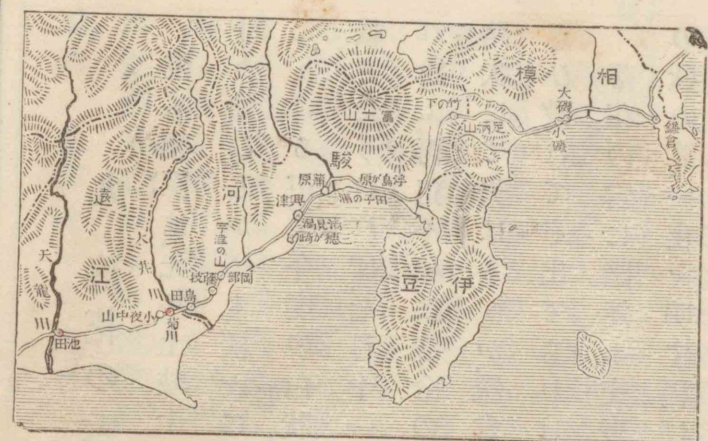
九 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後召捕られて鎌倉迄下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀ごもに、専ら陰謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯不赦は法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮一夜を明す程だにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ我が故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ

望月の駒
引り来り
こゝ成るはあらし

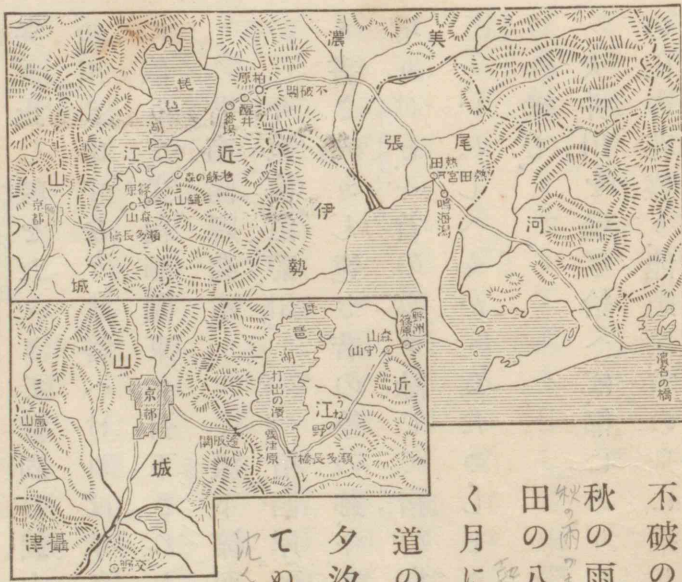
(一) あふ坂の關の清水にかけみえて今やひくらむ望月の駒。(紀貫之、拾遺集)
(二) 近江より朝立ちくればうれの野になつぞなくなるあけぬこの夜は。(古今集)
(三) 白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色つきにけり。(紀貫之、古今集)
(四) 鏡山いざ立ちよりにて見て行かむ年経ぬる身は老いやしぬると。(大伴黒主、古今集)



心の中ぞ哀なる。馬を止めても、道はあもあつし。憂きをば留めぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く身をうき舟の浮沈み駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふか哀なり。時雨もいたく守山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の山はありこても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる古郷を雲や隔つらむ。番場醒が井柏原

一年とてついでに越さるる日思
ほふかつたかたこした
運命とい
ふはなほ
や命なりけり小
夜の中山。(西行
法師、新古今集)

(五) さよ千鳥聲こそ近くなる海渦傾く月に潮やみつらむ。(藤原季能、新古今集)



龍川を打渡り、小夜の中山越行けば、白雲路を埋み來て、そこも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が命なりけり。詠じ

(一) 宗行卿の誤ならんといふ。

つゝ二たび越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足
はやみ、日己に亭午に昇れば、かれいひ進らする程にて、輿を庭前に
昇き止む。轅をたきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、
菊川と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎
に依りて、光親卿關東へ召下されしが、此の宿にて斬られし時、

昔南陽縣菊水。

汲下流而延齡。

今東海道菊川。

宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀やいとぞ
増りけむ。一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをさく川のおなじ流に身をや沈
めむ。

(二) 京都の西郊嵯峨
にある龜山の離
宮。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐
の山の花盛り、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今

(三) 駿河なるうつ
の山へのうつい
も夢にも人のあ
はぬなりけり。
(伊勢物語)

(四) 富士の根の煙は
なほぞ立ちのぼ
る上なきものは
思なりけり。(藤
原家隆、新古今
集)

は二度見ぬ夜の夢と成りぬと思ひつゞけ給ふ。鳴田藤枝にかゝり
て岡邊の眞葛うら枯れて、物の悲しき夕暮に、宇都の山邊を越行け
ば、葛楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住所を求むとて、東の
方に下るさき、夢にも人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくや
こ思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ
波の關守に、いと涙を催され、向はいづこ三保が崎、興津蒲原打過
ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつ
つ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や淺き船浮きて、
おり立つ田子のみづからも、うき世をめぐる車返し、竹の下道行き
なやむ、足柄山の峠より大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎ
の急ぐさしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、
鎌倉にこそ着き給ひけれ。(太平記)

一〇 東路の旅

四條天皇の御代。

鴨長明
源光宗 源光親
源平盛衰記
平家盛衰記
東園紀行

遊子猶行於殘月、函谷鷓鴣。(賈島、和漢朗詠集)

仁治三年の秋八月十日あまりのころ、都を出でてあづまへ赴く事あり。まだ知らぬ道のそら山重り江重りてはるく遠き旅なれども、雲を凌ぎ霧を分けつゝ、しばしは前途の極り無きに進む。終に十餘りの日數を経て、鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜のこまり、或は海邊水流のかすかなる砌に至る毎に、目に立つ處々、心こまる節々を書きおきて、忘れずしのぶ人もあらば、おのづから後の形見にもなれどてなり。

東山の邊りなる住家を出でて、逢阪の關打過ぐる程に、駒引渡る望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧立渡りて、深き夜の月影ほのかなり。ゆふつけ鳥かすかに音づれて、遊子なほ残月に行きけむ。函谷の有様思ひ合はせらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關の邊りに藁屋の床を結びて、常は琵琶をひきて心を澄まし、大和歌を詠

世の中はとてどもかくてもおなじこと宮も藁屋もはてしなげれば。(蟬丸、新古今集)

大和國高市郡高市村。

第四課參照。

じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきをわびつゝ、ぞ過しける。

いにしへのわらやの床のあたりまでこゝろをこむる逢阪のせき

關山をすぎぬれば、打出の濱粟津の原など聞けども、未だ夜のうちなれば、さだかにも見えわかず。むかし天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都遷ありて、大津宮を造られけり。聞くにも、このほごは古き皇居の跡ぞかし。おぼえてあはれなり。

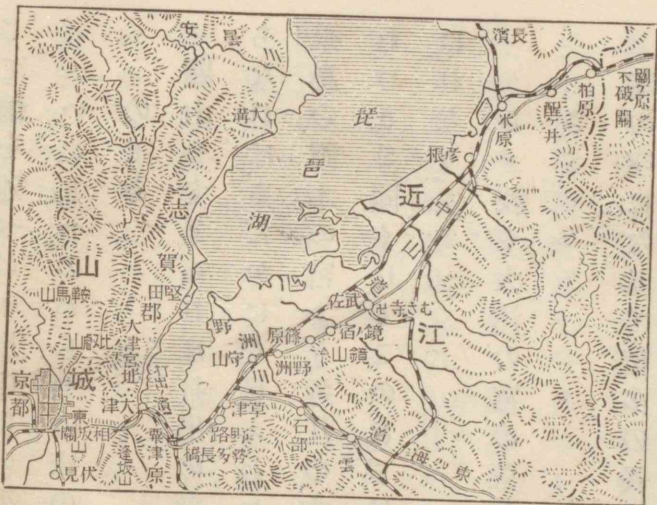
さゝ波や大津の宮の荒れしより名のみのこれる志賀の故

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほごに、湖遙かにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ、よめりけむ歌思ひ出でられて、漕ぎゆく舟のあとの白波、誠にはかなく心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝながめし跡をまたぞな
がむる

近江國野洲郡

影漫南山青澗
濃白樂天、新撰朗詠集



篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見えわたる。向の汀緑深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影をひたさねども、青くして恍漾たり。洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなど生ひわたれる中に、鴛鴦の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。都を立つ旅人この宿にこそ泊りけるが、今は打過ぐる類のみ多くして、家

水手
舟
歌
絵
舟
歌
舟
歌

飛鳥川の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる(讀人しらす、古今集)

世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる(讀人しらす、古今集)

遺愛寺鐘欲枕
聽(白樂天、和漢朗詠集)

居もまばらになりゆくなご聞くにこそ、變りゆく世のならひ、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりご覺ゆれ。
行く人もこまらぬ里となりしより荒れのみまさる野路の

篠原

行ききくれぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたる心ちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊りの草の庵の寢覺もかくやありけむ。こあはれなり。行末遠き旅の空思ひつゞけられて、いさいたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だにかたしきわびぬ。このあき風

この宿を出でて、笠原の野原打通るほごに、老蘇の森といふ杉むらあり。下草深き朝露の霜にかはらむ行末も、はかなく移る月日な

(二) 俗稱は佐藤義清。鎌倉時代の歌人。建久元年歿、年七十三。

れば遠からずおぼゆ。
かはらじなわがもごゆひにおく霜も名にしおいそのもり
の 下 草

名に負ふ老蘇の森も今に霜
かたじけなく白く成る
負ひ老の如名(理行)す

音に聞きし醒が井を見れば陰暗き木の下の岩根より流れ出づ
る清水、あまり涼しきまで澄渡りてげに身にしむばかりなり。餘熱
未だ盡きざるほどなれば往還の旅人多く涼みあへり。かの西行が
道のべに清水流る、柳かげしはしこてこそ立ちごまりつれと詠
めるも、かやうの處にや。
道のべの木陰の清水むすぶとてしはしすまぬたび人ぞ
なき

柏原といふ處をたちて美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底
におとづれ山風松の梢にしぐれ渡りて、日影も見えぬ木の下道、あ
はれに心ぼそし。越えはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の板びさし

(三) 藤原良經。

人すまぬ不破の關屋の板びさし
荒れにし後はただ秋の風。新古今集

最早大徳の関屋の板びさし
行る人もまじ秋の風の吹し

(四) 水の面に照る月
なみなかぞふればこよひぞ秋の
最中なりける。
(源順、拾遺集)

(五) 三五夜中新月
色、二千里外故
人心。(白樂天、
和漢朗詠集)

清の月を
二千里の外に
けれ

年經にけりこ見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の
風」と詠ませたまへる歌思ひいでられて、この上は風情もめぐらし
がたければ、賤しき言の葉を遺さむもなか／＼に覺えて、此處をば
空しく打過ぎぬ。

株瀬川さいふ處にこまりて、夜ふくる程に川端に立出でて見れ
ば、秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて、照る月なみもかぞ見ゆ
るばかり澄渡れり。二千里の外の人故人の心遠く思ひやられて、旅の
思いこゝおさへ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、花浴を出で
て三日、株瀬川に宿して一宵しば／＼幽吟を中秋三五夜の月に傷
ましめ、かつ／＼遠情を前途一千里の雲に送る。などある家の障子
に書きつくるついでに、
知らざりき秋のなかばの今宵しもかゝる旅寝の月を見む
こは

(東關紀行)

(一) 鎌倉時代の女流文學者。歌人。藤原爲家の妻。弘安六年歿。
(二) 古文孝經。

高野 美盛
同 道 三 尚 三 凌 三 三
サナチアルの流石の
見ルヤサチアル

すまひ
あまのつじ

いざよふ月

阿 佛 尼

むかし壁の中よりもごめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身のうへの事は知らざりけりな。水莖の岡の葛の葉、かへすくも書き置く跡たしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすてたまはぬ政にももれ、忠臣の世を思ふ情にも捨てらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけり。ご思ひ知りながら、またさてしもあらで、なほこのうれへこそ遣るかたなく悲しけれ。

さらにも思ひつゞくれば、やまご歌の道はたゞ誠少く、あだなるすさびばかりご思ふ人もやあらむ。日本の本國に天の窟戸開けし時、よもの神たちの神樂の詞をはじめて、世を治め、物をやはらぐる媒となりけり。ごぞ、この道の聖たちはしるし置かれたりける。

(三) 藤原爲家が寶治中、續後撰集を撰し、正元中、續古今集を撰したるをさしたり。
(四) 爲顯・爲相・爲守。
(五) 播磨の國細川庄。

(六) 人の親の心は闇にあられども子を思ふ道に迷ひぬるかな。(藤原兼輔、後撰集)

(六) 建治三年十月十六日。

さてもまた、集を撰ぶ人はためし多かれど、二たび勅をうけて世

世にきこえあげたるは、たぐひ猶ありがたくやありけむ。そのあごにしも携りて、三たりのをのこごども、百千の歌の古反故どもを、いかなる[え]にありけむ。預りもたるこごあれど、道をたすけよ。子をはぐくめ、後の世をこへ。ごて深き契を結びおかれし細川の流も故なくせきごめられしかば、あごごふ法の燈火も、道をまもり、家をたすけむ。親子の命も、諸共にきえを争ふ年月を経て、危く心細きものから、何ごしてつれなく今日まではながらふらむ。惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひ捨つれども、子を思ふ心の闇は、なほ忍びがたく。道を顧みるうらみは、やらむ方なく、さてもなほあづまの龜の鏡にうつつさば、くもらぬ影もやあらはるゝごせめて思ひあまりて、萬づの憚を忘れ、身をえうなき物になしはてて、ゆくりもなく、いざよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

(一) 神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける。讀人しらす、後撰集)

頃梅頭路の美稱はみ冬たつはじめの定めなき空なれば降こりみ降らずみ時雨もたえず嵐コサにきほふ木の葉さへ涙コサこともに亂れ散りつゝ事コサにふれて心細く悲しけれど人やりならぬ道なればいきうしコサごてもごごまるべきにもあらで何コサこなくいそぎ立ちぬ。

粟田口といふ所より車はかへしつ程なく逢坂の關こゆる程に、定めなきいのちはしらぬ旅なれどまたあふ坂さたのめて、ぞゆく

野路といふ所は、こし方ゆくさき人も見えぬ日はくれかゝりて、

いこ物がなしと思ふに時雨さへうちそぐ。
うちしぐれふるさと思ふそでぬれてゆくさき遠き野路の
しの原

こよひは鏡といふ所につくべしと定めつれど暮れ果てて行きつかず守山といふ所にこままりぬ。こゝにも時雨なほしたひきに

けり。

いこ此處なほ袖濡らせこややどりけん間なく時雨のもる山にし此處も

けふは十六日の夜なりけりいこア苦しめて臥アしぬ。

いまだ月の光はかすかに残りたるあけぼのに守山を出でて行く野洲川わたる程時さきだちて行く旅人の駒の足の音ばかりさチヨやかにて霧いこ深し。

旅人はみなもろこもに朝立ちてこま打ちわたす野洲のかはざり

十七日の夜は小野の宿といふ所にこままる。月出でて山の峯に立ちつゞきたる松の木の間に境目けぢめ見えていこ木更面白し。こゝは夜深き霧の迷ひにたどり出でつ醒が井アいふ水夏ならば打過ぎましやこ思ふにかち人はなほ立寄りてくむめり。

北^ルフチニクニテ^テニテ^テ自分^カ
むすぶ手に濁るこゝろをすゝぎなばうき世の夢やさめが
井の水

さぞおぼゆる。美濃の國關の藤川わたるほごに、まづ思ひつゞけける。

わが子ども君につかへむためならでわたらましやは關の藤川

不破の關屋の板びさしは今もかはらざりけり。
ひまおほき不破の關屋はこのほごの時雨も月もいかにも
るらむ

關よりかきくらしつる雨しぐれに過ぎて降りくれば道もい
さあしくて心より外に笠縫のむまやこいふ所に暮れ果てぬごご
ごまる。

たび人は衰うちはらふゆふぐれの雨にやごかる笠ぬひの

さじ。(十六夜日記)

一二 富士の裾野

若山 牧水

*
名は繁。歌人。

窓を開けて見るご疑もなき晴天である。しかも無類な日和を思はせる空だ。

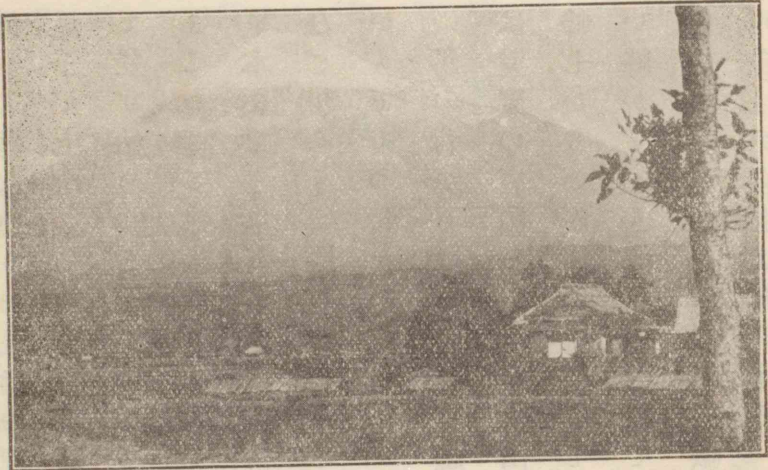
まだ日は出てゐなかつた。何とも云へぬ微妙な宏大な傾斜を引いて、遙かに足柄の方に擴つてゐる曠野は、まだ夜露に濡れたまゝであつた。そしてその端から端にかけて、あまねく吹渡つてゐる冷たい風が、はつきり眼にも見え、心にも感ぜられた。殊に宿の眼下の窪地一帯に吹く朝風は、薄黄に枯れた玉蜀黍の葉から葉へあざやかな音を立て、枯葉にまじる桑の青葉の露の色は、こごさらに深く見えた。瞳をすゑてこの廣い景色に向つてゐるご、遠く喇叭の響が聞え、汽車の喘ぎが聞える。見れば遙かな野末を御殿場へ急ぐ汽車の

煙が眞白く細く地に這うて見えた。

ふと心づきながら慌てて頭を擧げようとする。これはまたどうであらう。その窓からはやゝ斜めうしろに、ちやうどこの荒れた宿屋の背戸のところに、くつきりとして我が富士が嶺はその錆色の姿をあらはしてゐるのであつた。やゝが富士よ。ご手をもさし伸べたいほど、つい其處に、そのいたゞきには既に薄紫の日影を浴びて、にこやかに聳えてゐるのであつた。

日は足柄の上からだん／＼昇つて來る。一段一段と照らされてゆく富士の嶺、やがてその日の影が裾野に及ぶ。其處を流れてゐる風は一齊に走り始めた。芒ススキが光り、玉蜀黍が光り、この部落を圍んで、こび／＼に立つてゐる杉の木立が光るやうになる。もうその鮮かな日光は、私の立つてゐる高い窓までもやつて來てゐるのであつた。

印象の湧く



尻端折シラシラに草鞋カワモリばき、洋傘一本を手に提げて宿屋を出かけた私の姿は、昨日自宅の門を出た時と同じであつたが、心持はもうすつかり旅の者になり切つてゐた。宿の前から道は登りになつてゐた。傘を開いてうしろかつぎに強い朝日に乾しながら、てく／＼と登り始める。十軒あまりの家の間を行きすぎると、直ぐ杉の森に入つた。少し登ると、幾程もなく杉は盡きて灌木の荒い林となつた。富士は愈々明らかにその林の向に大きく親しく見えてゐる。宿の前から

續いた急な坂が一しきり切れた所に休んで居ると、下から一人の馬子が上つて來た。道を問ふやうにして聲をかけ、馬のあとについで登り始めた。そして聞けば、その馬子も十里木の宿まで行くといふ。これ幸甚、私はそれに頼んで乗せて貰ふことにした。須山から十里木まで二里、其處から大宮まで五里、殊にこの五里の道の悪さは、ひごからうと聞いてゐるので、少しでも脚を大事にして置きたいからであつた。

馬の背からは浅い林を超えて一面の野原が見渡された。左右には愛鷹アヅカの裏山が——この山は沼津あたりの海岸からは唯一つの峰しかない廣い穩かな山であるが、正面の峰の裏にはそれより高い峰が三つも並んで聳えてゐるのであつた。地圖には愛鷹から次第に奥にして位牌嶽、呼子嶽、御前嶽と記してある。いづれもその七八合目から上は御料林皇宮御料林で、いかにも茂つた山となつて居る。薄い深

い紅葉の色を見せて、木深く靜かにうねつて居る。今通つて居るのはつまりその山の根で、それから富士の根がたまで二里か三里か、富士を正面にして左右に互る野原の廣さはそれこそ十里か十五里か、見る涯もない野である。その中でも、丁度馬から見て過ぎる其處の野は唯一面の穂芒ホムギの原で、それに豊かに朝日が宿つてゐるのであつた。餘りの美しさに馬を止めさせて煙草にしてゐると、夫婦者の一組が追ひついて、これも煙草を取出した。彼はこの邊の地理に明るく、それから通りかゝつた或小さな峠風の所は、昔此處に關所のあつた跡だと教へた。

この邊にといふからと、この道は昔箱根の抜け道に當つてゐたので、それを見張つてゐたのだといふ。彼等夫婦は同じく十里木まで竹細工の出稼にゆく者であつた。

關所のあとだといつたあたりから、また林に入つた道はゆるや

かな下りになつて、やがて其處に五六軒の茅屋カヤヤの集つてゐる所が見えた。十里木である。夫婦の教へたまゝに、其の村に唯一軒あるこいふ茶店の前で私は馬から下りた。馬の上の朝風はかなり寒かつた。で竹細工屋のするまゝに、私も泥草鞋を其處の大きな圍爐裡に踏込んでカヤヤ櫓火にあつた。

櫓火に草鞋をあぶりながら、半ば横になつたまゝ、見上げる軒先に富士山があつた。店の前の道幅は其處だけ幾らか廣くなつて、馬などを繋ぐ場所となつてゐた。つまり其處は西の野と東の野との運送品を交換する場所に當つてゐることを、私はあこで知つた。その廣場の端に古びた木の鳥居が立つてゐた。その鳥居の眞上に富士山は仰がれるのだ。初めそれを富士の神を遙拜するための鳥居だこばかり私は思つてゐたが、暫くして鳥居の方から小さな徑が玉蜀黍畑を横ぎつて向の笹山に通じ、その山の根に小さな祠のあ

るこゝが解つた。山はまことに笹ばかり繁茂して、青く圓く横たはつてゐる様が、眞上に富士のあるだけに、手にも取りたい愛らしさであつた。その笹でこの部落の者は生活してゐるのださうである。竹行李を編んだりパイプを作つたりして。

私は先刻から思ひついてゐた事を老婆にうち出して見た。さうか今夜一晚此の家に泊めて呉れ、喰べるものは何もいらぬから。こいふのであつた。不思議な人間だこいふ風で、初は相手にもしなかつたが、竹細工屋まで口添して呉れて、さうく老婆も承知した。それを聞くと、私は急に圍爐裡から飛降りた。そして洋傘や羽織を其處へ置いて身軽になりながら、今來た道の方へ引返して歩いた。馬から見て過ぎた芒の野原をもう一度ゆつくりと見て來たかつたからであつた。

近いと思つたのに、一里がほ間助詞灌木林を歩いてから美しい野に

出た。日の闌けたせむか、穗芒のつやは先刻ほどではなかつたが見れば見るほど廣い野であつた美しい野であつた。

野は唯一面の平野ではない。さながら大海の中に出て見るうねりの様に、無数の柔らかな圓い高みがあつて、高みは高みに續き、果しなくゆるやかに續き下つて、其處に無邊無碍の大きな裾野を成してゐるのである。その一つ一つの小高いうねりが優しく美しい。一帶の地面には青い芝草が生えてゐる。東京の郊外の植木屋などが育ててゐる芝である。その芝の中に松蟲草が伸出て、濃むらさきの花を咲き盛らせ、その花よりはなほ丈高く輕やかに抽んで咲いてゐるのは芒である。これまたこの草ばかりが茂りに茂つて、上に咲揃つたその穗などは、まるで厚い織物のやうにも見えてゐる所があつた。或窪みには芒が茂り、或高みには松蟲草が咲き、その二つが相寄り相混つて咲擴つてゐる場所もあり、それが先から先こ

つゞいて美しいつやのある大きなうねりを輝かしてゐるのである。

富士山はこのうねりの野の端から端に臨んで、唯大きく近く聳えてゐた。私がかねてから斯ういふ感じを持つてゐた、多くの山もさうだが、殊に富士は遠くからのみ見るべきだ。近づいて見る山ではない。と。要するにそれも、眞實に近づいて見ぬひが道理ニノスレタごごであつた。かうしてこの日仰いだ富士は全くの眞裸であつた。あたり是一片の雲もなく、たゞ或一點だけ萬年雪の残つてゐる外は、頂上近くにすらまだ雪を置いてゐなかつた。頂上からこの銀のはての根がたまで、たゞ赤裸々にその地肌を露はして立つてゐるのみである。殊に其處からは、世にいふ森林帯の山麓にも、たゞ僅かにあるかなきかの樹木を一わたり置いてゐるのを見るに過ぎぬのであつた。このあらはな土の山石の山岩の山が寂として中空に聳えてゐる姿

を、私はまことに如何に形容したらよいであらう。生れたばかりの山にも見え、全く年月といふものを超越した山にも見えた。殊にどうであらう、四邊にどれ一つこの山と手と手を取つて立つてゐる山もないのであつた。地に一つ空に一つ、何處をどう見てもたつた一つのこの眞裸の山が、嶺は柔らかに鋭く聳えて天に迫り、下はおほらかに而も峻しく垂れ下つて大地に横を張つてゐる。前なく後なく、西もなく東もない。

山に見入つてゐた瞳を下して、この大きな野を見ると、其處にはや既に一種の狭苦しさが感ぜられた。私はとある小高い所から馳下りて他の小高い所へ移つて行つた。更に他の一つへ走つた。鶉がそのまろい姿を地に現して、鋭く啼きながら飛んで行つた。あとも立つのを見た。

この見事な野原の一端に出て来て、野を見、山を仰いだ私は、一時

まつたく茫然としてしまつた。そしてその時間が過去ると、更にまた新しい心で眼前の風景に對した。海中のうねりにさながらの野原のうねり、その無数のうねりをなす圓みを帯びた丘のうちで、これが最もすぐれて高く且美事であるかを眼で調べ始めた。そしてやがて脱兎のごとく最初に立つた一點から走り出した。

どの丘が一番高いといふことは、謂はば不可能のことであつた。眼分量で計つて認め、た一つの高い丘へ馳上つて見ると、更にまたそれより高いやうな丘がその先にあつた。二つ三つと駈廻つた後、私も諦めて或一つの丘の上にごつかりと身體を横たへてしまつた。柔らかな草の上に仰向けにころがると、富士は全く私の顔を覗き込むやうにして眞上に近く聳えてゐるのであつた。そして其處から正面に見ゆる山腹に、剝つたやうな途方もなく大きな崩壊の場所が見え、その崩れた下の端に鳶の喙に似た恰好をして不意に

一個所隆起してゐる所が見えた。即ち寶永山である。剝れた場所は或頃の噴火の痕でその時噴き出されたものが凝つてこの寶永山を成したものだといふ。

富士の山肌の複雑さを私は寝ながらしみじみと見た。遠くから見れば先づ一色に黒く見ゆるのみであるが、決して唯の黒さではない。その中に緑青に似た青みを含み、薄く散らした斑な朱の色も其處らに吹出てゐる。黄も混り、紫も見える。そして山全體にわたつて刻まれた細かな襞が、襞に宿る空の色が、更にそれ等の色彩に或複雑と微妙さをあらはしてゐるのである。富士山はたゞ遠くより望むべきもの、殊に雪なき頃のそれは見る可からざるものといふ風に思つてゐた私の考は、全く狂つてしまつた。要するに今日までは私は多く概念的にこの山を見てゐたのであつた。今日初めて赤裸々なこの山と接して、生きものに似た親しさを覚え始めたので

白馬非馬

ある。一種流行化したいはゆる「富士登山」をも私は忌み嫌つて、今まで執拗にこの山に登らなかつたが、斯うなつて來るに、その考も怪しくなつた。早速來年の夏はあの頂上まで登つてゆきたいものだ。なごご、鮮かに晴れた山巔を仰いで微笑した。

寝轉んでゐる芝草の中に、五六寸の高さの、純白な花の群り咲いた草を私は見附けた。何處もなく見覚えのある草花である。摘みとつて匂を嗅ぎながら思ひ出した。俗にせんぶりと稱へ、腹痛の薬になるといつて、幼い頃よく故郷の野で摘集めた草であつた。見れば其處らに澤山咲いてゐる。珍しさや昔戀しさに、私はそゞろに立ちよつてそれを摘みはじめた。芒や松蟲草などの蔭に、ほんごに限りなく咲擴つてゐるのであつた。

をりく、鶉が飛んだ。じゅつ、じゅつ、じゆるん、じゆるん、といふ風の啼き聲をば初めから耳にしてゐたのであつたが、草から出て飛

ぶのを見るまで、何の鳥だかはつきり解らなかつた。一つの丘から舞立つては直ぐ近くの芒の中に舞下る。見れば誰一人ゐないと思つた野原の中にも、矢張そちこちと人影が見えるのであつた。遠くの丘の頭などに馬の立つてゐるのも見える。人は多く芒を刈つてゐるのであつた。

遠くから見たのでは、自身の身體よりも大きいやうに見える鎌を両手に振つて振子の動くやうな姿で刈つてゐるのである。或所をば荷馬車が二臺續いて通つてゐた。白い芒の中から現れてはまたその波に隠れてゆく。さながらに沖に出てゐる小舟のやうなものであつた。

せんぶり草はいつか両手に餘るほごになつた。いつ何處に生れたともない微かな白い雲が空に浮かんでは富士の方に寄つて来て、またいつとなく消えてゆく。丘から丘に歩いてゐる中に、私の心

は次第に靜かに、次第に寂しくなつて來た。あたりに輝く芒の穂も飛んでゐる鶉も、いづれも私の心に今までにない鮮かな影を投げるやうになつた。歩くのが苦しく、私は又一つの高みの上に坐つてしまつたが、永くは坐つて居られなかつた。そして最初目標としておいた野の端の杉木立の方へ、いつとなく私は小走りに走つてゐた。心のうちで、又は口に出して、左様なら、左様なら。と云ひながら今はまさしく西日の色に染まりつゝ、ある野の中を、極めて穩かな心持で小走りに走つてゐた。

一里餘りを急いで先刻の茶店にと歸つて來ると、老婆は居ずに、圍爐裡の滑火が僅かに煙つてゐた。急に寒さを覺えて、勝手口から新しい櫓を運びながら、草鞋もまだごらぬまゝに圍爐裡に足を踏込んだ。そしてとろ／＼と火の燃えだすのを見て、仰向けに疊の上に寢てしまつた。軒さきには例の富士が眞赤に夕日を浴びて聳え

てゐるのだ。
 「もぎたてをお前に喰はすべし」と思つて玉蜀黍を取りに行つて
 ただあよ。
 と云ひながら、まだ薄青いのを抱へて、丸いやうになつて、老婆は何
 處からか歸つて來た。(紀行隨筆文集)

一三 平家物語抄

俱利伽羅おとしの事

さるほごに源平兩方陣をあはす陣のあはひ僅か三町ばかりに
 寄せあはせたり。源氏も進まず、平家も進まず、やゝあつて源氏の方
 より、精兵をすぐつて十五騎、楯の面に進ませ、十五騎が上矢の鏑を
 たゞ一度に平氏の陣へぞ射入れたる。平家も十五騎を出いで、十五
 の鏑を射返す。源氏三十騎を出いで、三十の鏑を射さすれば、平家も

けわし現
 うむり現在
 推量
 意者も各別層層あり

【國語讀本卷六、
 六くりから谷
 参照。】
 越中國磯波郡磯
 波山中にあり。

俱利伽羅不動明
 王を祭る。

三十騎を出いで、三十の鏑を射返へさす。源氏五十騎を出せば平家
 もまた五十騎を出し、百騎を出せば百騎を出す。兩方百騎づつ陣の
 面に進ませ互に勝負をせむとはやりけるを、源氏の方より制して
 わざと勝負をばせさせず、かやうにあひしらひ、日を待暮し夜に入
 つて、平家の大勢を後の俱利伽羅が谷へ追落さむとばかりける
 を、平家これをば夢にも知らず、共にあひしらひ、日を待暮すこそは
 かなけれ。

さるほごに、北南よりまはる搦手の勢一萬餘騎、俱利伽羅の堂の
 邊りにまはりあひ、簾の方立ちあつた、鬨をどつとどつくりける。
 おのゝ後を顧み給へば、白旗雲の如くにさしあげたり。この山は
 四方巖石であるなれば、搦手よもまはらじとこそ思ひつるに、こは
 いかにとぞ騒がれける。

さるほごに、大手より木曾殿一萬餘騎、鬨の聲をあはせ給ふ。礪並

山の裾、松長の柳原、菜萁の木林に引隠したりける一萬餘騎、日の宮林に控へたる今井の四郎六千餘騎も、同じう鬨の聲をぞあはせける。前後四萬餘騎がをめぐ聲に、山も河もたゞ一度に崩るゝところ聞えけれ。

さるほごに、次第に鬨うはなる。前後より敵は攻め來る。きたなしや、返せや返せやといふやから多かりけれども、大勢の傾き立つたるは、さうなう取つて返すことの難ければ、平家の大勢、後の俱利伽羅が谷へ、われ先にとぞ落ち行きける。先に落したるもの見えねば、この谷の底にも道のあるにこそとて、親落せば子も落し、兄が落せば弟も落し、主落せば家の子郎等もつゞきけり。馬には人、人には馬、落ちかさなり、落ちかさなり、さばかり深き谷一つを、平家の勢七萬騎でぞ埋めたりける。潤泉血を流し、死骸岡を爲せり。さればこの谷のほとりには、矢の穴、刀の疵、今も残つてありとこそ承れ。

澱層法

カイツノ(長)

裁判官

(三) 越前國大野郡にある古刹。

平家の方の侍大將、上總の大夫の判官忠綱、飛驒の大夫の判官景高、河内の判官秀國も、この谷の底に埋れてぞ失せにける。また備中の國の住人瀬尾の太郎兼康は、聞ゆる兵にてありけれども、運や盡きにけむ。加賀の國の住人倉光の次郎成澄が手にかゝつて、生捕にこそせられけれ。また越前の國、越前が城にて返忠したりける平泉寺の長吏齋明威儀師も捕はれて出で來る。木曾殿、その法師はあまりに憎きに、まづ斬れ。とて斬らせらる。大將軍維盛、通盛、希有にして加賀の國へ引退く。七萬騎が中より、僅かに二千餘騎こそ遁れたれ。同じき十二日、奥の秀衡がもとより、木曾殿へ龍蹄二匹奉る。一匹は白月毛、一匹は連錢葦毛なり。やがてこの馬に鏡鞍おいて、白山の社へ神馬に立てらる。木曾殿今は思ふ事なしとておはしけるが、但し叔父の十郎藏人殿の志保の戦こそおぼつかなければ、いざや行いて見むとて、四萬餘騎が中より馬や人をすぐつて、二萬餘騎で馳せ

向ふ。こゝに氷見の湊を渡らむとし給ひけるが折ふし潮満ちて、深
 さ淺さを知らざりければ、木曾殿まづはかりごと、鞍置馬十匹ば
 かり追入れられたりければ、鞍づめひたるほごにて、相違なく向の
 岸にぞ著きにける。木曾殿これを見給ひて、淺かりけるぞ、渡せや。こ
 て、二萬餘騎さつと渡いて見給へば、案の如く、十郎藏人はさんざん
 に駈けなされ、引退き、人馬の息をやすむる所に、新手の源氏二萬餘
 騎、平家三萬餘騎が中へかけ入り、もみにもうで、火出づるほごにぞ
 攻めたりける。大將軍三河の守知教討たれ給ひぬ。これは入道相國
 の末子なり。その外兵多く亡びにけり。平家そこをも追落されて加
 賀の國へ引退く。木曾殿は志保の山うち越えて、能登の小田中、新王
 の塚の前にぞ陣を取る。

那須の與一の事

さるほごに阿波讃岐に平家をそむいて源氏を待ちける兵ども、

【國語讀本卷四、
 十七、「扇のま
 らし参照。」

七八段

十天
 一町
 六間

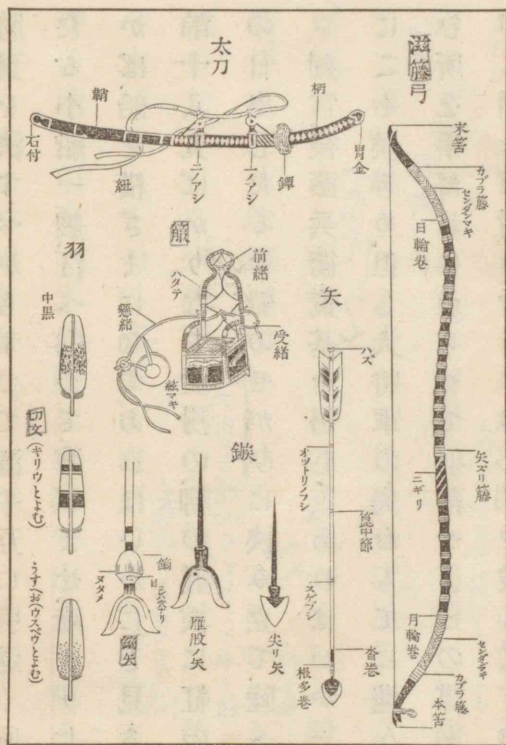
傾國
 一掃掃
 一願願
 雨願願
 人願願



あそこの嶺こゝの洞より、十四五騎二十騎うちつれうちつれ馳せ
 來るほごに、判官ほごなく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、
 勝負を決すべからずして、源平互に引退く所に、沖より尋常に飾つ
 たる小船一艘、汀へ向つて漕ぎよせ、渚より七八段ばかりになりし
 かば、船を横ざまになす。あれはいかにと見る所に、船の中より年の
 齡十八九ばかりなる女房の、柳の五衣に紅の袴著たるが、皆紅の扇
 の日出したるを船のせがひに挟み立て、陸へ向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。とのたまへば、射よと
 にこそ候らめ。但し大將軍の矢おもてに進んで傾城を御覽ぜられ
 む所を、手だれにねらつて射落せよ。この謀とこそ存じ候へ。さりな
 がら扇をば射させらるべうもや候らむ。と申しければ、判官、味方に
 射つべき仁は誰かある。と問ひ給へば、手だれども多う候中に、下野
 の國の住人、那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へご

も、手はきいて候。と申す。判官、證據があるか。「さん候。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候。と申しければ、判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。



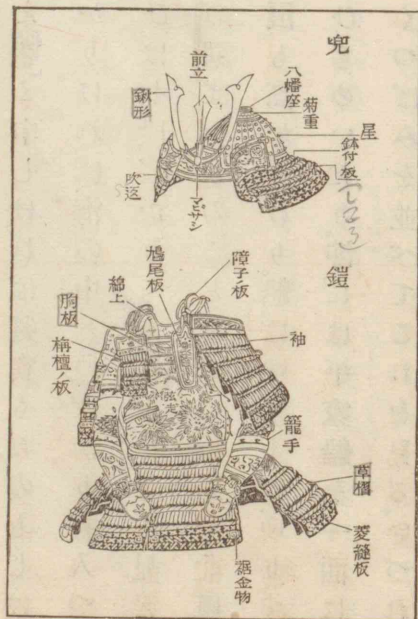
矢負ひ、うすきりふに鷹の羽割合はせてはいだりける。ぬため、高紐にかけ、判官をぞさし添へたる。滋籐の弓脇に挟み、兜をばぬいで、高紐にかけ、判官

與一その頃は未だ二十ばかりの男なり。褐に赤地の錦を以て大領、端袖いへたる直垂に、萌葱絨の鎧著て、足白の太刀を佩き、二十四さいたる斑生の

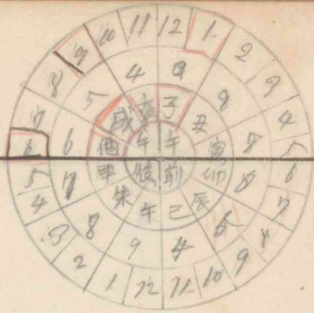
なむり
けむ
らむ

時つ未東

官の御前に畏る。判官、いかに與一、あの扇のまん中射て、敵に見物せさせよかし。このたまへば、與一、仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、長き味方の御弓矢の瑕にて候べし。一定仕らうずる仁に仰せつけらるべうもや候らむ。と申しければ、判官大に怒つて、今度鎌倉を立つて、西國へ向はんずる者どもは、みな義経が下知をそむくべからず。それに少しも仔細を存ぜむ人々は、これよりさうく、鎌倉へ歸るべし。とぞのたまひける。



與一かきかねて辭せば、あしかりなむ。さや思ひけむ。さ候はば、はづれむをば存じ候はず。御詔で候へば、仕つてこそ見候はめ。とて、御前



をまかり立ち、黒き馬の太うたくましきに、まるほや摺つたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。味方の兵ども、與一が後を遙かに見送りて、この若者、一定仕らうずると覺え候。と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入つたりけれども、なほ扇のあはひは、七段ばかりもあらむ。こそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風はげしう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。船はゆり上げ、ゆりする漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面にあらべて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも、晴ならずといふ事なし。

與一目をふさいで、南無八幡大菩薩別してはわが國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須の温泉、大明神、願はくはあの扇のまん中射さ

せてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切折り自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さむと思し召さば、この矢はづさせ給ふな。と心の中に祈念して、目を開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一、鏑を取つてつがひ、よつびいてひようご放つ。小兵といふ條、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦ひぐくほごに長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに白波の上に漂ひ、浮き沈みぬゆられけるが、沖には平家船をたゝいて感じたり。陸には源氏籠をたゝいて、よめきけり。

弓流しの事

あまりのおもしろさに感に堪へずや思ひけむ、船の中より年の

【國語讀本卷六、十、「弓流し」參照。】

齡五十ばかりなる男の黒革緘の鎧著たるが、白柄の長刀杖につき、扇立てたる所に立つて舞ひすましたり。伊勢の三郎義盛與一が後に歩ませ寄つて、御誼であるぞ、これをもまた仕れ。こいひければ與一、今度は中差取つてつがひ、よつびいて、ひようこ放つ。舞ひすましたる男のまつたゞ中をひようつばと射て、船底へまつさかさまに射倒す。あゝ射たりこいふ人もあり、いや／＼情なしこいふ者も多かりけり。平家の方にはしづまり返つて音もせず。源氏はまた籠をたゝいてごよめきけり。

平家これを本意なしとや思ひけむ、弓持つて一人楯ついて一人、長刀持つて一人、武者三人渚にあがり、源氏こゝを寄せよとぞ招きける。判官、やすからぬ事なり。馬強ならむ若黨ども馳せ寄つて蹴散らせこのたまへば、武藏の國の住人美尾の屋の十郎、同じき四郎、同じき藤七、上野の國の住人丹生の四郎、信濃の國の住人木曾の中

次、五騎つれて、をめて駈く。まづ楯の陰より、塗籠に黒ほるはいだる大の矢を持つて、まつさきに進んだる美尾の屋の十郎が、馬の左のむながいづくしを、筈のかくるゝほごにぞ射こうだる。屏風をかへすやうに馬はごうと倒るれば、主は弓手の足を越え、馬手の方へ下り立つて、やがて太刀をぞ抜いたりける。

また楯の陰より大長刀打振つてかゝりければ、美尾の屋の十郎、小太刀大長刀にかなはじとや思ひけむ、かい伏いて逃げければ、やがて續いて追つかけたり。長刀にて薙がんずるか、と見る所に、さはなくして、長刀をば弓手の脇にかい挟み、馬手の手をさしのべて、美尾の屋の十郎が兜の鍔をつかまうとす。つかまればと逃ぐる。三度つかみはづいて、四度のたびむと掴む。しばしぞたまつて見えし、鉢附の板より、ふつと引切つてぞ逃げたりける。のこり四騎は、馬を惜しうでかけず、見物してぞゐたりける。美尾の屋の十郎は、味方の

馬のかげに逃入つて、息つぎゐたり。敵は追うても來ず。その後、兜の
鍔をば長刀の先に貫き、高くさし上げ、大音聲をあげて、遠からむも
のは音にも聞け、近くば目にも見給へ。これこそ京童の呼ぶなる、上
總の惡七兵衛景清よ。ご名のり棄てて、味方の楯のかげへぞのきに
ける。

平家これに少しこゝちを直して、惡七兵衛討たすな者ども、景清
討たすな、つゞけや。さて、二百餘人渚にあがり、楯を雌鳥羽につき並
べ、源氏こゝを寄せよやとぞ招きたる。判官やすからぬ事なりとて、
田代の冠者を先に立て、後藤兵衛父子、金子兄弟を弓手、馬手になし、
伊勢の三郎を後として、判官八十餘騎をめぐいて先をかけ給へば、平
家の方には馬に乗つたる勢は少し、大略徒武者なりければ、馬に當
てられじとや思ひけむ、しばしもたまらず引退き、みな船にぞ乗り
にける。楯は算を散らしたるやうに、さんぐに蹴散らさる。源氏勝



に乗つて馬の太腹つかるほどに、うち入れうち入れ攻め戦ふ。船の
中より熊手、薙鎌をもつて、判官の兜の鍔に、からりからりと打ちか
け打ちかけ、二三度しけれども、味方の兵ども、太刀・長刀の先にて、打
拂ひ打拂ひ攻め戦ふ。

されどもいかゞはし給ひたりけむ、判官、弓を取落されぬ。うつぶ
し、鞭を以てかき寄せ、取らむ取らむと給へば、味方の兵ども、ただ
捨てさせ給へ、捨てさせ給へ。と申しけれども、遂に取つて笑うてぞ
返られける。おとなどもは、みな爪はじきをして、たひ千疋萬疋に
かへさせ給ふべき御たらしなりと申すとも、いかでか御命にはか
へさせ給ふべきか。と申しければ、判官、弓の惜しさにも取らばこそ。
義經が弓といはば、二人しても張り、もしくは三人しても張り、叔父爲
朝なごが弓のやうならば、わざこも落いて取らすべし。庭弱たる弓
を敵の取り持つて、それこそ源氏の大將軍九郎義經が弓よなご嘲

大まか馬鹿に有れ

弄せられむが口惜しさに命にかへて取つたるぞかし。このたまへば皆またこれを感じける。

一日戦ひ暮し夜に入りければ平家の船は沖に浮かび源氏は陸にうち上つて群高松の中なる野山に陣をぞ取つたりける。源氏の兵どもはこの三日が間は寝ざりけり。一昨日攝津の國渡邊福島を出づること大風大波にゆられてまごろまず昨日阿波の國勝浦に著きて軍し夜もすがら中山越え今日また一日戦ひ暮したりければ人も馬もみな疲れはてて或は兜を枕にし或は鎧の袖籠などを枕として前後も知らずぞ臥しにける。されどもその中に判官と伊勢の三郎は寝ざりけり。判官は高き所に打上つて敵や寄すると遠見し給ふ。伊勢の三郎はくぼき所に隠れゐて敵寄せばまづ馬の太腹射むとて待ちかけたり。平家の方には能登殿を大將軍としてその夜夜討にせむと支度せられたりけれども越中の次郎兵衛と江

説、夜すのり一夜
夜もすがら一馬も

見の次郎が先陣を争ふほどにその夜も空しく明けにけり。寄せたりせば源氏なじかはたまるべき。寄せざりけるこそせめての運のきはめなれ。

一四 三右衛門の罪

芥川龍之介

文政四年の師走である。加賀の宰相治修の家來に知行六百石の馬廻り役を勤める細井三右衛門といふ侍は、相役衣笠太兵衛の次男數馬と云ふ若者を打果した。それも果し合ひをしたのではない。或夜の戌の上刻頃、數馬は南の馬場の下に、謠の會から歸つて來る三右衛門を闇打に打果さうとし、反つて三右衛門に斬伏せられたのである。

この始末を聞いた治修は、三右衛門を目通りへ召すやうに命じた。命じたのは必ずしも偶然ではない。第一に治修は聰明の主であ

文學者。東京帝國大學出身。
明治三十五年生。
性格獨出。
上刻上中下

る。聰明（聡明）の主だけに、何事によらず、家來任せと云ふことをしない。みづから或判断を下し、みづからその實行を命じない。うちは心を安んじない。と云ふ風である。

第二に治修は三右衛門へ、ふだんから特に目をかけてゐる。嘗て亂心者を取抑へた際に、三右衛門外一人の侍は二人とも額に傷を受けた。しかも一人は眉間のあたりを、三右衛門は左の横鬢（横つら）を紫色に腫れ上らせたのである。治修はこの二人を召し、神妙（神妙）の至りと云ふ褒美を與へた。それから、「ごうぢや、痛むか。」と尋ねた。すると一人は、「有り難い仕合せ、幸ひ傷は痛みませぬ。」と答へた。が、三右衛門はにががしさうに、「かほ（かほ）の傷も痛まなければ生きてゐる。こは申されませぬ。」と答へた。爾來、治修は三右衛門を正直者だと思つてゐる。あの男は兎に角、巧言は云はぬ、頼もしいやつだと思つてゐる。かう云ふ治修は、今度のことも、自身三右衛門に仔細を尋ねて見

るより外に、近みちはないと信じてゐた。

仰を蒙つた三右衛門は、恐るゝ御前へ伺候した。しかし、悪びれた氣色などは見えない。色の淺黒い、筋肉の引緊（シマンタ）つた、多少疳癩（カンカ）のあつらしい顔には、決心の影さへ仄（カシヤク）めいてゐる。治修はまづかう尋ねた。

「三右衛門、數馬はそちに闇打をしかけたさうぢやな。するに何かそちに對し、意趣を含んで居つたものに見える。何に意趣を含んだのぢや。」

「何に意趣を含みましたか、しかとしたことはわかりませぬ。」

治修はちよいと考へた後、念を押すやうに尋ね直した。

「何もそちには覺はないか。」

「覺と申すほどのことはございませぬ。しかし或はあゝ、云ふことを怨まれたかと思ふことはございませぬ。」

「何ぢや、それは。」

「四五日ほど前のことでございます。御指南番山本小左衛門殿の道場に納會の試合がございました。その節私は小左衛門殿の代りに行司の役を勤めました。尤も目録以下の勝負だけを見届けたのでございます。數馬の試合を致した時にも、行司はやはり私でございます。」

「數馬の相手には誰がなつたな。」

「御側役平田喜太夫殿の總領、多門と申すものでございました。」

「その試合に數馬は負けたのぢやな。」

「さやうでございます。多門は小手を一本に面を二本とりました。數馬は一本もごらずにしまひました。つまり五本勝負の上には見苦しい負けかたを致したのでございます。それゆゑ行司の私に意趣を含んだかもわかりませぬ。」

「すると數馬はそちの行司に依怙があると思つたのぢやな。」

「さやうでございます。わたくしは依怙は致しませぬ。依怙を致す譯もございませぬ。しかし數馬は依怙のあるやうに疑つたかとも思ひます。」

「日頃はごうぢや、そちは何か數馬を相手に口論でも致した覺はないか。」

「口論などを致したことはございませぬ。唯……」

三右衛門はちよと云ひ濼んだ。尤も云はうか云ふまいか。ためらつてゐる氣色とは見えない。一應云ふことの順序か何か考へてゐるらしい面もちである。治修は顔色を和げたまゝ、靜かに三右衛門の話し出すのを待つた。三右衛門は間もなく話し出した。

「唯かう云ふことがございました。試合の前日でございます。數馬は突然私に先刻の無禮を詫びました。しかし先刻の無禮と申す

の^は一體何の^{こと}なんか、^{ごんご}わからぬのでございませう。又何か^ご考へて見ても、^{數馬}は苦笑ひを致すより外に返事を致さぬのでございませう。わたくしはやむを得ませぬゆゑ、無禮をされた覺もなければ、詫びられる覺もなほ更ないご、かう^{數馬}に答へました。すると^{數馬}は得心したやうに、では思違だつたかも知れぬ。ごうか心にかけれられぬ様に、今度は素直に申しました。其の時は苦笑ひよりは北^{ひつ}笑い^{あはれ}んでゐたことも覺えて居ります。

「何を又^{數馬}は思ひ違へたのぢや。」

「それはわたくしにもわかり兼ねます。が、いづれ取るに足らぬ些細の^{こと}だつたでございませう。——その外は何もございませぬ。」

其處に又短い沈黙があつた。

「ではごうぢやな^{數馬}の性質は疑ひ深いごでも思つたごはな

目録
切紙
伯仲叔
兄弟がよく以て居る

伯仲叔
兄弟がよく以て居る

兄弟がよく以て居る

いか。

「疑ひ深い氣質ごは思ひませぬ。ごちらかと申せば、若者らしい、何ごとも色に露はすのを恥ぢぬ。——その代りに多少激し易い氣質だつたかと思ひます。」

三右衛門はちよと言葉を切り、更に言葉をと云ふよりは吐息をするやうにつけ加へた。

「その上、あの多門との試合は大事な試合ごございました。」

「^{數馬}は切紙でござります。しかしあの試合に勝つて居りましたら、目録を授つた筈でございませう。尤もこれは多門にもせよ、同じ羽目になつて居りました。^{數馬}と多門ごは同門のうちでも、丁度腕前の伯仲した相弟子だつたのでございませう。」

治修は少時黙つたなり、何か考へてゐるらしかつたが、急に氣を

變へたやうに、今度は三右衛門の數馬を殺した當夜のここへ間を移した。

「數馬は確に馬場馬のついでの下にそちを待つてゐたのぢやな。」

「多分はさやうかと思ひます。その夜は急に雪になりましたゆゑ、わたくしは傘をかざしながら、御馬場の下を通りかゝりました。丁度又、伴もつれず、雨着もつけずに参つたのでございませぬ。すると風音の高まるが早いか、左から雪が吹雪の様なしまいて参りました。わたくしは咄嗟に半開きの傘を斜に左へ廻しました。數馬はその途端に斬りこみました。ゆゑ、わたくしへは手傷も負はせずに傘ばかり斬つたのでございませぬ。」

「聲もかけずに斬つて参つたか。」

「かけなかつたやうに思ひます。」

「その時には相手を何と思つた。」

「何と思ふ餘裕もござりませぬ。わたくしは傘を斬られると同時に、思はず右へ飛びすさりました。足駄もその時には脱いで居つたやうでございませぬ。二の太刀が参りました。二の太刀はわたくしの羽織の袖を五寸ばかり斬りさきました。わたくしは又飛びすさりながら、抜きうち相手を拂ひました。數馬の脾腹はらを斬られたのはこの刹那だつたと思ひます。相手は何か申しました………」

「何かとは。」

「何と申したかわかりませぬ。唯何か烈しい中に聲を出したのでございませぬ。私はその時にはつきりと數馬だと思ひました。」

「それは何か申した聲に聞覚えがあつたと申すのぢやな。」

「いえ、左様ではございませぬ。」

「では、なぜ數馬と悟つたのぢや。」

治修はぢつと三右衛門を眺めた。三右衛門は何とも答へずに居

る。治修はもう一度促すやうに、同じ言葉を繰返したが、今度も三右衛門は袴へ目を落したきり、容易に口を開かうもしない。

「三右衛門なげぢや。」

治修はいつか別人のやうに、威嚴のある態度に變つてゐた。この態度を急變するのは治修の慣用手段の一つである。三右衛門はやはり目を伏せたまゝ、やつと噤ツツムんでゐた口を開いた。しかしその口を洩れた言葉は「なぜ」に對する答ではない。意外にも甚だ悄然ツツムとした罪を謝する言葉である。

「あたら御役に立つ侍を一人、刀の錆に致したのは三右衛門の罪でございます。」

治修はちよこ眉をひそめたが、目は相變らず嚴かに三右衛門の顔に注がれてゐる。三右衛門は更に言葉を續けた。

「數馬の意趣を含んだのは尤の次第でございます。私は行司を

性格—治修の威嚴

三右衛門の性格
乃木大將の性格

勤めた時に、依怙の振舞を致しました。」

治修は愈、眉をひそめた。

「そちは最前は依怙は致さぬ、致す譯もないと申したやうぢやが。」

「そのことは今も變りませぬ。」

三右衛門は一つづつ考へながら、述懐じゆわいするやうに話し續けた。

「私の依怙と申すのは、さう云ふことでございませぬ。ここさらに數馬を負かしたとか、多門を勝たせたいとかと思はなかつたことは、申し上げた通りでございます。しかし何もそればかりでは、依怙いごがなかつたとは申されませぬ。私は一體、多門よりも數馬に望もちを囑もちして居りました。多門の藝はこせついで居ります。如何に卑怯しやうけつなことをしても、唯勝ちさへ致せば好いと、勝負ばかりを心がけるちやうど正道ちやうどの藝でございませぬ。數馬の藝はそのやうに卑しいものではございませぬ。ごこまでも眞ともに敵を迎へる正直の藝でござい

まする。私はもう二三年致せば、多門は到底數馬の上達に及ぶまいとさへ思つて居りました。……」

「その數馬をなぜ負かしたのぢや。」

「さあ其處でございませう。わたくしは確に多門よりも數馬を勝たせたいと思つて居りました。しかし私は行司でございませう。行司はたとひ如何なる時にも私曲不仕合を抛たねばなりません。一たび二人の竹刀の間へ扇を持つて立つた上は、天道に従はねばなりません。私はかう思ひました。ゆゑ、多門と數馬との立合ふ時にも公平ばかりを心がけました。けれども唯今申し上げた通り、私は數馬に勝たせたいと思つてゐるのでございませう。云はば私の心の秤は數馬に傾いて居るのでございませう。私はこの心の秤を平らに致したい一心から、自然と多門の皿の上へ錘オモリを加へることになりました。しかも後に考へれば、加へ過ぎたのでございませう。多門寛大な事には寛過過ぎりな

に失した代りに、數馬には嚴に過ぎたのでございませう。」

三右衛門は又言葉を切つた。が、治修は默然と耳を傾けてゐるばかりだつた。

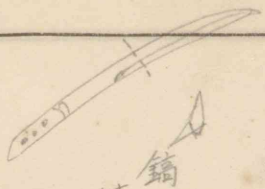
「二人は正眼に構へたまゝ、ごちらからも最初にしかけずに居りました。その内に多門は隙を見たのか、數馬の面を取らうと致しました。しかし數馬は氣合をかけながら鮮かにそれを切り返しました。同時にまた多門の小手を打ちました。私の依怙の致しはじめはこの刹那でございませう。私は確にその一本は數馬の勝だと思ひました。が、勝だと思ふや否や、いや、竹刀の當りかたは弱かつたかも知れぬと思ひました。この二度目の考は私の決心をにぶらせました。私はとう／＼數馬の上へ當然舉げる筈の扇を舉げずにしまつたのでございませう。二人は又少時の間、正眼の睨み合ひを續けて居りました。すると今度は數馬から多門の小手へしかけました。多

門はその竹刀を拂ひざまに、數馬の小手へはひりました。この多門の取つた小手は數馬の取つたのに比べますと弱かつたやうでございませぬ。少くとも數馬の取つたよりも見事だつたと申されませぬ。しかし私はその途端に多門へ扇を舉げてしまひました。つまり最初の一本の勝は多門のものになつたのでございませぬ。私はしまつたと思ひましたが、さう思ふ心の裏には、いや、行司は誤つては居らぬ、誤つて居ると思ふのは數馬に依怙のある爲だぞと、自己の良心くもがあるののでございませぬ。……」

「それからどう致した。」

治修はやゝ苦々くろくろしげに、相變らずちよこ口を噤んだ三右衛門の話を催促した。

「二人は又もこのやうに、竹刀の先をすり合はせました。一番長い氣合のかけ合ひは、この時だつたかと思つて居ります。しかし數



馬は相手の竹刀へ竹刀を觸れたと思ふが早い、いきなり突入れました。突はしたゝかにはひりました。が同時に多門の竹刀も數馬の面を打つたのでございませぬ。私は相打を傳へる爲に、まつ直に扇を舉げて居りました。しかしその時も相打ではなかつたのかもわかりませぬ。或は先後を定めるのに迷つて居たのかもわかりませぬ。いや、突のはひつたのは、面に竹刀を受けるよりも先だつたかもわかりませぬ。けれども兎に角相打をした二人は、四度目の睨みあひへはひりました。すると今度もしかけたのは數馬からでございませぬ。數馬はもう一度突を入れました。が、この時の數馬の竹刀は心もち先が上つて居りました。多門はその竹刀の下を胴へ打ちこまうと致しました。それから彼是十合十合ばかりは、互に鑷シヤウを削りはました。しかし最後に入り身になつた多門は、數馬の面へ打ちこみま

「その面は。」

「その面は見事にとられました。これだけは誰の目にも疑のない多門の勝でございませぬ。數馬はこの面をこられた後、だん／＼あせりはじめました。わたくしはあせるのを見るにつけても、今度こそはぜひと數馬へ扇を擧げたいと思ひました。しかしさう思へば思ふほど、實は扇を擧げることためらふやうになるのでございませぬ。二人は今度も少時の後、七八合ばかり打合ひました。その内に數馬はさう思つたのか、多門へ體當りを試みました。さう思つたのかと申しますのは、日頃數馬は體當りなどは決して致さぬのでございませぬ。私ははつと思ひました。又はつと思つたのも當然のこととございませぬ。多門は體を開いたと思ふと、見事にもう一度面を取りました。この最後の勝負ほど、呆氣（精のない勝負）なかつたものにはございませぬ。私はさう／＼三度とも、多門へ扇を擧げてしまひました。」

「わたくしの依怙と申すのはかういふことでございませぬ。これは心の秤から見れば、云はば一毫（少しの差）を加へたほどの釣合の狂ひかも知れませぬ。けれど數馬はこの依怙の爲に大事の仕合を仕損じました。わたくしは數馬の怨んだのも、今はさうやら不思議のない成行だつたやうに思つて居ります。」

「ぢやが、そちの斬拂つた時に、數馬と申すことを悟つたのは。」
「それははつきりとはわかりませぬ。しかし今考へますると、わたくしは何處か心の底に數馬に濟まぬと申す氣もちを持つて居つたかと思ひます。それゆゑ忽ち狼藉者を數馬と悟つたかと思ひます。」

「するど、そちは數馬の最後を氣の毒に思つて居るのぢやな。」
「さやうでございませぬ。且は又先刻も申した通り、一かごの御用も勤まる侍にむざと命を殞（入）させたのは、何よりも上へ對し奉り、申

譯のないことと思つて居ります。

語り終つた三右衛門は、今更のやうに頭を垂れた。額には師走の寒さ云ふのに汗さへかすかに光つてゐる。いつか機嫌を直した治修は、大様に何度も頷いて見せた。

「好い、好い。そちの心底はわかかつてゐる。そちのしたことは悪いことかも知れぬ。しかしそれも詮ないことぢや。唯この後は……」

治修は言葉を終らずに、ちらりと三右衛門の顔を眺めた。

「そちは一太刀打つた時に、數馬といふことを知つたのぢやな。ではなぜ打果すのを控へなかつたのぢや。」

三右衛門は治修にかう問はれると、昂然と淺黒い顔を起した。その目には、又前にあつた不敵な輝も宿つてゐる。

「それは打果さずには置かれませぬ。三右衛門は御家來でございます。ごは云へ又侍でもございます。數馬は氣の毒に思ひまし

數馬は縁藉者で區別す。

師範國文新選卷三

ても、狼藉者は氣の毒には思ひませぬ。」（雜誌改造）

一五 短歌抄

海名通田 古今集 尾上 柴舟
正岡 氣方葉集 板 こんど

伊豆の旅行すすむ
むらさきにしづめる谷ぞ目にうかぶ天城やまなご思ひいづ

れば
○ まだあさき春のゆふぐれ常磐木のひかりかさねし葉にぞ雪

ふる

○ 花のもりはかに雪となりにけりさくらの花のあをきゆふ
春くもりにはかに雪となりにけりさくらの花のあをきゆふ

ぐれ

沈丁花はるのゆふべの庭の面につめたくにほひひろごりにけり

名は雄太郎。歌人。東京の人。

東条の人

大正拾一年
明治九年生
岡山縣人
假名を藤原下

博士。東京女子高等師範學校教授。

名は八郎。文學博士。東京女子高等師範學校教授。

宮城縣の人

若山 牧水

見おろせばふもとに山の幾うねりうねれるにみな松の生ひ
たる
いづくにか父のこゑきこゆこの古き大きな家の秋のゆふ
べに

窪田 空穂

名は通治。歌人。
早稻田大學出身。
長野縣の人

五月の日いだきて青き香をはけるから松ばやし行けど盡き
なく
みすまかる信濃のよるのふゆの星あなさやけしと仰ぎつる
かな

前田 夕暮

名は洋三。歌人。
神奈川県

火の氣なき宿に歸りてくらやみにマチをたづぬる指のつめ
たさ

文學博士。東京
帝國大學講師。
三重縣の人

佐々木 信綱

冬のあさ貧しきやごの味噌汁のほひとこもに起きいでに
けり

物寂れ 秋の終り頃七日月の葉か散る
大門ははやさざしけりふる葉散るおほ竹むらの七日づきか
な

齋藤 茂吉

醫師にして歌人。
東京帝國大學醫
科出身。

眞夏日のひかり澄み果て浅茅原にそよぎのたつのきこえけ
るかも

もの投げて聲をあげたるをさなごを心虚しくわれは見がた
し

島木 赤彦

本名久保田俊彦。
歌人。
長野縣

山ふかく霧はれゆきて松の葉のしみらに照るはさびしかり
 けり
 日かげ土かたくこほれる庭の上を鼠はしりて土蔵に入りた
 り

與謝野晶子

清水へ祇園をよぎるさくら月夜こよひ逢ふひこみなうつく
 しき
 金色の小さきこりのかたちして銀杏散るなりゆふ日のをか
 に

一六 鉛筆日鈔

八月三十日

草の露がまだ乾かぬうちから暑くなつた。宮戸島の宿を立つて

（三）
 文學者。大正四
 年及年三十七
 宮城縣桃生郡
 松島最東の島。

（三）
 歌人。
 山崎月夜

（四）
 宮城縣桃生郡
 宮戸島の對岸。

東名の濱へもぐる一錢の渡しまで來ると、干潮で水が非常に淺く
 なつて見える。草鞋も脚絆もこつて危ぶみながら徒涉して見るこ
 水は漸く膝のあたりまでしかなかつた。徒涉して見たのが何とな
 く嬉しかつた。昨日の渡守は今、白帆を揚げて沖へ出て行く所であ
 る。渡しは舟の必要もなくなつたので漁でもしようといふのであ
 らう。弓なりの砂濱が遙かにつゞいて居る。白泡のさし引く汀を行
 くと、草鞋の底から足袋のうらが濕つて心持がよい。だん／＼行く
 と、そこにもこゝにも珍しい貝が打ちあがつて居る。五寸もあるの
 が目の前に轉がつて居る。餘り珍しく思つたから、笠も蘆もはふつ
 て波打際をあさつた。大きいのがあれば、囊（サキ）に拾つた小さいのは棄
 てて、濱一杯にあさつた。見返ると、笠も蘆も遙かの遠くになつて居
 た。遠くさいへば沖はぼんやり薄霧がなびいて居る。貝は手拭の兩
 端へしつかり括つて手に提げた。

(一) 宮城縣桃生郡。
(二) 宮城縣牡鹿郡。

砂濱の盡きる所が松林で、松林を出ると野蒜ノアサである。野蒜から石巻街道へ出る積りで、或小村へ來ると、その貝は毒だといはれたので、惜しかつたが棄ててしまつた。婆さんが笊へ玉蜀黍を五六本入れて提げて來た。それは生か。と聞いたたら、茹でたので直ぐにたべられるのだから買つてくれ。といつた。そんなら買はう。といつたら、婆さんは路傍の民家の浅い井戸で、余の砂だらけの手拭を洗つて、其の玉蜀黍を括つてくれた。馬の齒ウマノハのやうな玉蜀黍である。

八月三十一日

鮎川アサガハの港からだら／＼と上つて、勾配の急な坂を下りる。杉の木の間を出ると、茶店がある。茶店の前を行きすぎようとする女房メウカウがあこから呼びかけて、お山へ渡るなら草鞋を買うて鹿の土産を持つて行け。といつた。これはお山の砂を草鞋へつけて來ることは昔から禁じてあるので、島へ渡る者は皆新しい草鞋を穿いても、ご

(三) 宮城縣牡鹿郡。

(四) 金華山。

りの船に乗る時にはぬぎ捨てる筈ださうである。鹿の土産といふのは小さな煎餅を括つたのである。渚へおけると、船頭小屋には四五人で楷火を焚いて居る。客が集らねば船は出さないといつて、一向に取りあはぬ。小船が一艘動揺しつゝある。雨が降つて來た。突兀たる岸の巖には波がだん／＼強く打ちつけて、小船が更に動揺する。雨が大粒になつた。幻の如く見えた金華山はまた雲深く隠れて、裾だけが短くあらはれた。山の裾は懐かしい程近い。桐油トウアブを着た道者がぞろ／＼と余の後からおりて來た。各自に背中を高くして小荷物を背負つて居る。一行の饒舌るのを聞いて、船頭のうちの老人が、一行の者を「米澤ぢやないか。」といつた。米澤の山の中だ。といつたので、言葉でこのものでも分る。と老人は頗る得意である。道者が來ても船はまだ出さうともせぬ。海がだん／＼悪くなりさうなので、何故出さないのだ。といふと、此の日の渡しはこれ限りなので、金

華山から鮎川へ酒賣に渡つた者が戻るまで待つて居るのだ。といふのである。鮎川に二人で酒を飲んでるのがあつたが、あれなら迎も今日のうちには歸りさうはない。と道者の一人がいつた。遂に船頭も待ちあぐんで、一人が南京米の袋をかぶつて出て行つた。所がそれも沙汰がない。屹度あいつも引つ掛つたに違ない。呑氣なにも程がある。といつて、道者等は頻りに咬いて居る。幾ら待つても島の酒買は來ないので、やつこのこで船が漕ぎだされた。三人が艫を押して舳の一人が櫂をこる。巉巖せうがんに添うそなうて船が進む。鹿渡しの岬に近づくと、波は澎湃ぱんぱいとして、船が思ひ切つて揺れる。岬に打ちつける波は花崗石の如き白い柱を立てる。北方に開けた海上には江の島列島が大小相並んで、狭い瀬戸の間から見える。列島は波の穂に隠れては復あらはれる。桐油を頭からかぶつて、余と向合ひになつてゐた男は、目がごろつとして、さつきから下脣が垂れた儘であつた。

が、遂に桐油でぐるつと顔をくるんで轉がつてしまつた。他の道者も顔が眞蒼になつて、小縁へしがみついた儘ままをまついて居る。老人の押しして居た艫は艫べそが外れた。老人は狼狽ろうたいして、嵌めようとしたが、船の動搖が激しいので、幾らあせつても嵌らぬ。止める、止める。いゝやゝ。と兩肩からうんと力を入れた若い男が、聲にも力が籠つて叱りつけるやうにいつた。老人は極りわるげに船の底に蹲つた。雲が一方から段々にはげると、三角に握つた握飯のやうな金華山が、頭から押へつけるやうに聳えて居る。中腹の神社から下には、鉄で梢を刈込んだやうな木立が、青い芝の間に鹽梅しんばいされて、庭園の如く見える。常磐木の繁茂した山上には、綿打弓から飛ぶ綿のやうな雲がちぎれて居る。船が岸へつくると、道者は一同に漸く生返つたといふ鹽梅で、船ぢや我折がせつたやア。といひながら、ばらばらと勢よく駈けあがつた。青い芝は地にひつゝ、いた様になつて居て、糸薄

の叢が連つて居る。道者が口々に「鹿、鹿」と呼んだら、思はぬ糸薄の中から大きな角が動いて、鹿が五六匹あらはれた。土産を出して見せると五六尺の近くまで寄る。こちらから更に近づくと、ついそ逃げ、投げてやればたべる。一行の旅装が黄色な桐油を掛けたり、笠をかぶつたりして居るので、氣味が悪いのであらう。鹿が煎餅をたべる所を、道者が三四人で手と手をつないで鹿を坂の下へ追ひつめやうとしたが、鹿は軽く飛退いて、けるつこ立つて居る。道者はこんなこをしては騒いで、船の中に居た時は別人のやうである。よく見ると、鹿は糸薄の中に、そこにもこゝにもけるつこ立つて居る。其の斑紋の美しいことは、奈良の鹿などの到底及ばぬ所である。顧みれば一行の乗つて來た船は追手に帆を揚げて、雨の中に遙かに隔つて居る。木立にはひるこ庭木のやうに見えたのは皆二抱へ三抱への樹ばかりであつた。

雨はしとくとして深更までやまぬ。厠へ立つたら目の前をひらりと飛ぶものがあつた。驚いて見ると鹿である。手を出したら鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。

九月一日

社務所から出た一行十人ばかり、白衣の先達（先達者）に案内されて金華山に登る。坂が極めて峻しい。曉の霧がひやくと梢を渡つて、雪がはらくこかゝる。老樹の鬱然として濕つほい間を行くので、深山のやうな寂しい心持がする。忽ち後の方で「猿、猿」と囀（囀）る者があつたので、振りかへると、一行のうちの三四人が立止つて、梢を仰いで居る。余も急いで降りて行つて見ると、五六匹の猿が樅の喬木に枝移りをして居る所であつた。猿はゆさゆと枝を揺がしながら四足を立てて、こちらを見下して居る。赤い顔が仄かに見える。余は猿の樹に居るのを見たのは、これがはじめてである。からかつても見

山巔
つたかそ

たい様な気がした。一行の者は皆樹の下へ集つて、口々に「オンツァマ、オンツァマ」と呶鳴つて、手を叩いたり樹を揺ぶる眞似をしたりして騒いだけれど、彼等は一向平気で、枝をゆさゆさと揺がして居る。猿といふものは何處で見ても、（こつち）劇輕（ちんげん）なものである。道者の一行が騒いで居るうちに、先達は一人で、行つてしまつたかして、後姿も見えなくなつた。ばら／＼と先達の後を追掛けながら、道者の一人がいふのを聞くと、「この前に來た時は、猿が丁度栗を揺落した所へ通りかゝつたので、みんな拾つてしまつたら、枝から糞をかけられた」といふのであつた。

（山巔）の小さな社の縁へ腰をかけて、一行の者は、社務所で呉れた紙包の握飯をひらいた。縁先には僅かに二坪ばかりの芝生がある。何處から來たか鳥が二羽來て、一羽は芝生のめぐりに立つた樹木のとある枯枝へとまつて、一羽は足もとへおりた。おりた鳥は嘴を

あげたり首を曲げたりして、握飯が欲しさうに見て居る。余は鹿の土産がまだあつたので、投げてやつたら、ひよいと一跳ね跳ねて、それを（啞）へて元の處へ戻つて、足で押へてはむのである。さうして又嘴をあげたり首を曲げたりして見て居る。握飯を包んだ紙を投げてやつたら、嘴で引返し引返しして、その紙の中の飯粒をはむのである。幾百千の參詣者が繰返し繰返し登山するので、鳥までがこんなに馴れてしまつたものであらうが、深い木立の間を雲霧に濡れて漸く山巔について、何さなし、（人寰）を離れた感じ（たひら）で居る所へ、こんな鳥が飛んで來たのは更に別天地のやうに思はれた。一人が握飯の食残しを呉れたら、何と思つたかそれを啞へた儘、霧深い谷をさして飛んでしまつた。飛ぶ時に啞へた握飯がぼろりと缺けて芝の上へ落ちた。枯枝に止つて居た。二羽はこちらを見おろして居たが、遂におりては來なかつた。さうしてこれも大きな聲で鳴いたと思

つたら、ついと芝の上の飯をさらつて飛んで行つた。外洋の霧は山陰の梢を吹きあげて、蓬々として更に吹きおろす。木の葉が交つて飛散る。

霞の吹きつけるなかを山陰へおりる。やつぱり樹木が深くて坂が急である。段々おりて行くうちに霧が薄らいで、枯れた梢の間から空が朗かに見え出した。又誰か後の方で「鹿、鹿」と呶鳴つた。あれ、あれ。一人が指して居る方を見たら、その時はヒオウと鳴いた聲ばかりで、鹿は見えなかつた。ヒオウとまた鳴いた時は、聲は遙かに遠くなつて、三聲鳴いた時は、やつと聞取れる程であつた。

深い樹立を出ると、疎らな赤松が見え出して、窪んだ草原のやうな所になつた。先達は、皆さん此所は不淨場フジヤウバであります。といつて、自分が先に小便をした。一行の者も皆小便をした。草の中には羊齒の葉が秀でて、既に枯れた自然生の芍薬も交つて居る。此所からすぐ

に海へ出る。岸は皆削りたつた大きな巖である。断面には縦横に切れ目があつて、恰も十文字に繩を掛けた大荷物オモツが問屋の庭に積みあげられたやうな形である。小徑は此の斷崖の上をめぐつて北へ走る。一行はばらばらになつて先達マツダテに跟いて行く。左を仰いで見ると鬱蒼たる山の巔は頭に掩ひかぶさつた様で、その急峻な山の脚は恰も物かげから大手を開いて現れた人が、奔馬をばつたり食止めた様にこの小徑で切斷されて居る。小徑に沿うて到る所青芝と糸薄が茂つて居る。さうして糸薄の中には疎らに赤松が聳えて居る。時々鹿に逢ふことがある。山陰に居る鹿は能く馴れては居らぬと見えて、屹度逃げて行く。一つか二つか離れて居るのがひよつこり人を見るとき、非常に狼狽して叢を跳ねて逃げて行く。糸のやうな脚で跳ねるのが、ふわ／＼とした綿の上でも跳ねるかと思ふ様に見えて、如何にも輕げである。驚いて逃げる時にヒオウと細い聲で

鳴き捨てるのである。五六匹も揃つて居るといふと、體と體と押合ふ様にして或距離の所まで行つてしまふと、けろつとして何時までもこちらを見送つて居る。無邪氣なものである。鹿の尻は起すの尻もつこ禪をはめた様だう言ななし。といふ聲が又後の方から聞えた。大箱の岬といふ札の立つ所へ出た。急な山の脚が海へ踏ん込む前に、青芝の小山を拵へて、其の小山の頂近くから截斷して海へ捨ててしまつた時に恐しい懸崖が出来た。これが大箱の岬である。四つに偃うて覗いて見ると、さら／＼と僅かに碎くる白波が遙かの下の方である。其の遙かな下の方に小さなものが動く様に見える。それがだんだん昇つて近づく所を見ると、一匹の小さな蝶であつた。暫く見て居たら心持が悪い様になつた。大箱の岬を覗くものは馬鹿だといふのだ。道者がいつた。青芝は地にひつゝいた様で綺麗である。鹿がこの芝を喰ひに来ることがあると見えて、豆粒の様な鹿の糞がこ

ろ／＼と轉がつて居る。青芝の上に休んで居ると、何時の間にか蝶は懸崖の面を舞ひあがつたものと見えて、小さな黄色い羽をひらひらと動かしながら、めぐりめぐつて鹿の糞へとまつた。際涯際涯もな

い外洋を望むと、今日ばかりは波がないのかと思ふ程平靜である。余は一朝暴風がこの平靜な海を吹亂して、雲と相接して居る水平線の先から煽り立てて来る激浪が、此の大箱の懸崖の下に吼えたうたけびて、しぶきのとばしりが此の青芝へ氷雨の如く打ちかゝる時に、牡鹿が角を振立てて此の岬に突つ立つ所を想像して見た。

(炭焼の煙)

一七 丘の上

吉江 喬松

小松と薄と、矮い灌木の藪との續いてゐる丘の上へ来て、私はその藪の茂みの中へ身を置いた。

* 曾て孤雁と號す。早稻田大學教授。
鉛筆と針

丘は幾つかの巖をなして、背後に繞る連嶺の中軸から分れて、平野の上へ迫つてゐる。その巖と巖との間には小さな幾つかの谿が出来てゐて、その中には蒼黒い藪疊の下をくゞつて行く小流や、急な傾斜をした桑畑や、小松の原や、焼痕の草原などがつゞいてゐて、農夫の作小屋の一つ二つが目にはひる。一つの丘の上へ來て見ると、谿を隔てて幾つかの丘の頂が背比べでもしてゐるやうに立つてゐる。

八月下旬の日の光が、眞晝頃のことと焙りつけるくらゐに暑さうだが、その光を亂して、折々谿の中から冷たい大氣の流が、ひそかに肌膚へ忍びよる。縁の狭い帽子は顔へ當る日の光を遮るけれど、背から肩から胸からかけて、一面容赦なく照附けるのをそのまゝに、私は藪の中へ足を投出して、ぢつと身を締め、胸を抑へて、心臓の鼓動の靜まるの

を待った。

耳も近くですういゝ薄の葉が擦れ合つて、かすかな音を立ててゐる。藪の根本で何處かで、蟲の聲が時々起つて、また細く消えて行く。

俯向いてゐる頸元から、日がじり／＼喰入つて、痛いくらゐにも思はれる。けれど、その光が私の皮膚の細かな毛穴の一つ一つから奥深く射し込んで行くのではないかと思ふと、疲れて濁つた私の血は、それがために鮮かな紅にかはつて、勢よく運行し出すやうに思はれる。寧ろ胸を開いて、この光を胸臆へ吸込みたい、両手を開いてこの光を抱きたい。たゞり落つる日の光の力を、血管の中へ呼入れたい。明るい光が體の中を照らしたらば、ぼろ紙のやうな私の皮膚には弾力が増して來はしまいか。生々とした活力が欲しい。爽やかな山地の空氣と日光とは、疲労した私をまた生かして呉れるので

はあるまいか。

ごうくといふ物の響がふと私の背後に起つた。消えるでもなく始るでもなく、空中にたゆたつてゐる。

振返つて見るに、それは赤松の林だ。樹上に高く風が絡んで吹き去らない。薄紅の鱗をつけたやうな松の樹幹が、幾本も眞直に立つてゐて、頭だけを動かしてゐる。日は上からその葉の茂みを洩れて、地上に縞を織る。樹の根を繞つて、薄紫の草花が微かに咲いてゐる。ごうご互つて来る風につれて、かすかではあるが松の香が漂ふ。眞晝の日の光を受けて、樹幹から洩れる松脂の匂。——山地の健康を思はせるその香が、空中に漂つてゐる。

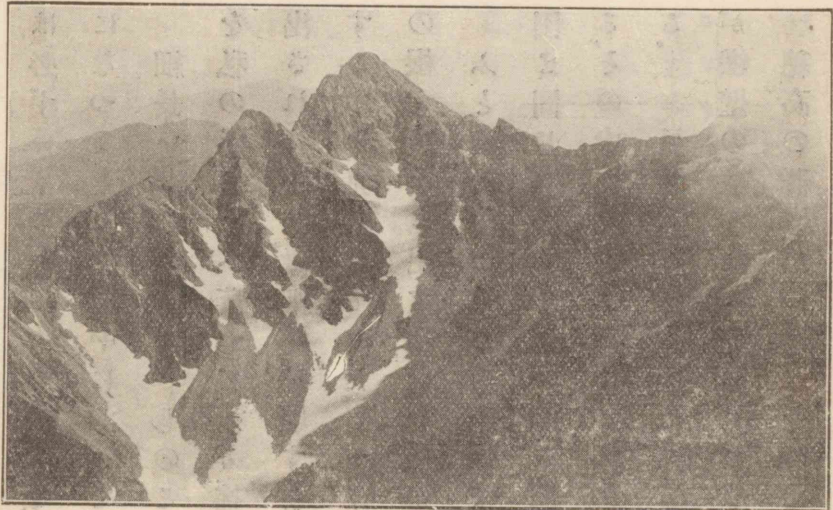
平原地の林の中を、いかにさまよひ求めても聞くことが出来な
い幽久の響松の樹の、この單純林の奏する樂の音の中には、遠い昔からの山地の歴史が織込まれてゐる。一簇の老樹の林のある中に

は必ずいくつかの古墳がある。苔のさびた匂と松脂の香とは一つになつて、その風の中に漂つてゐる。

細長い薄の葉と鼠さしのこまかい針のやうな葉が入亂れて影を私の手の上へ落して、折々揺れてゐる。私は自分の手の上へ描き出されたこの微細畫を壊すまいと、ぢつと其の影の亂れつ寄りつするのを見つめてゐた。じつ／＼と思ひ出したやうに、蟲がまた薄の根元で鳴き出す。冷たい風が藪の中を爬ふやうに寄せて来る。

ふと藪の中から顔を上げて向を見渡した。谿を隔てて桑畑が稻田と同じ緑色をしながらも、濃淡のけぢめをつけて近く輝いてゐる。その中に鎮守の森と地主の家の森とが、島のやうに點在してゐる。——見渡しのきく野は四五里を隔てて、そのさきに、國境の連嶺が鐵壁のやうに空を劃して立ちつゞいてゐる。

穂高の群峯が、他よりも秀でて連嶺の上に高く聳えてゐる。鋼鐵



雲現あ
 でも張つたやうな八月空を突
 裂いて立つてゐる連峯、その峯
 の間に消殘る雪の條は白く閃
 いてゐて、中空に反射してゐる。
 穂
 それより北につゞいて幾多の
 高
 連山が果てなき山の深さを見
 のせて遠く走つてゐる。幾度見て
 群
 も目醒めるばかりの山の姿だ。
 亂れた志を静め、動ずることな
 峯
 き深さを胸に据ゑつけて呉れ
 る。山と空とを劃する力の籠つ
 た併しなだらかな微妙な一線
 それをぢつと見つめてゐると、

山頂の音なき山頂

断えず一種の微動が、そこから起つて、四方へ散るやうに思はれる。
 その波動は雲無き空の碧綠を動かして、私の居る頭の上まで及ん
 で來るやうに思はれる。日の光と、物の響と、そしてこの音なき山頂
 の波動とは、一つの混成したリズムをなして、山地の晝に爽かな生
 生とした調子を與へてゐる。
 大私の身内の血は、今こそ順潮に動いてゐるぞといふやうな感じ
 が、強く胸をめぐる。はつきりした明るい心持、生々とした感じが、五
 體を引締める。

ビイツ／＼と鋭い啼き聲を立てて渡鳥の一群が、丘の出鼻の樂
 林の一角から、下の平らな桑畑の上を横切つて向の丘の上の一端
 へ消えて行つた。幾千羽群れて行く小鳥の羽は、光の波を翻し、煽り
 立て、光と蔭とを限ごつて、われ遅れじと争つて舞つて行く。はつき
 高く丘の上を乗越えたかと思ふともうその群の姿は向へ見えな

くなつた。鶴の一群だ。蒔いたばかりの大根の種子をあさり、出初め
 たばかりの粟の穂を求めて歩く旅鳥の群だ。身を隠す林があれば、
 忙しげにその中へむぐり込み、畑の獲物を見付けると、競つて舞ひ
 おりる漂泊者の群集だ。光の中にくゞり入つてゐる冷たい大氣の
 流動に促されて、惶しい姿をして、彼等は丘を越え、畑をあさつて舞
 つて行く。

頭上の松の響も、谿の中の流の音も、藪疊の上を走る冷たい風も、
 次第に高くなつて来た。静かな山地の眞晝は、今一時、秋來る前に、そ
 の鮮かな働を見せてゐるのだ。

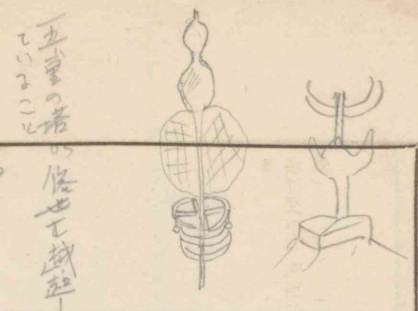
私はいつ迄もいつ迄も丘の頂に身を埋めてゐた。(若き自然)

一八 塔影

河井 醉 茗

*
 名は又平。文學
 者。
 全體として
 一八の塔影
 一八の塔影

墨繩たす番匠が
 今は大工の事
 今は大工の事



掌の上につくられて、
 朝狭霧の晴れゆけば

寶珠を天に捧げ持ち、
 岸に聳ゆる五層塔。

藏めし經も蠹みて、
 供養忘れし末の世の傍をわらう

雲をさへぎる勾欄に、
 清き鉤の痕見れば、

塵に氣韻も残るかな。
 秋は露盤に露うけて、

扉は神秘に閉されぬ。

持三
僧長
廣南
神

一作者のてあるて

佛放

四天の神に守られて

金輪際に根を埋め

夜は北斗をうかぶへり

家に住まざる山鳩の

巢くふに處得たればか

虚空杳かに翔れども

畫棟の朱の古びたる

浮圖を慕うて歸るらん

落暉は西に傾いて

五重の屋根の歴然と

重なりうつる草の上

人々

月は廂に浮かび出でて
九輪の影は水に在り

雲の崖より吹きおちて

風湖を拭ひ去る

波の面に刻まれし

藝術の花に咲きちらふ

時の力の遠きかな

その世に媚びし歌反古は

曆の嵐に破れたり

生命の岸を下に見て

天に呼吸する塔の

高き姿を水に見よ。(醉茗詩集)

一九 小品三章

夜學

中島廣足

寺々の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人も寝たるに、いさう
れしう、燈火あかくしなして、文机に打向ひたる、いみじう心すみて、
晝見たりしあたりの、何ごゝるなくて過ぎにしも思ひしられて、深
き心ばへある條々もおのづから解き得らるかし。かかげつくして

燈下
夜話
中島廣足

蹟筆 足廣島中

もなほねぶたさも知らず、油さし添へつゝ、見もてゆくに、遠き世の
人もたゞさし向ひ語らふ心地すさうしつくりて、をかしきふしふ

(一)
號は權園。國學者。元治元年歿、年七十五。
肥後國人

し、あるはふと思ひ得たることなごをば、墨おしすりつゝ、書きつけ
なごするもをかし。とりのこゑは夜深きにやと思ふに、いととく明
けはなれたる、しばしこてうちねぶる夢のうちも、あたしごごなら
むやは。(權園文集)

蟲の音

石川依平

家なみしきたる都のすまひは、前裁もほごなけれご、萩すゝきな
ごはさすがに、わかしりがほなるを、あはれと見わたるゆふつかた
に、親しき人のもとより、昨日嵯峨野にもとめしなりこて、蟲ごもあ

河上
依平

蹟筆 平依川石

また籠に入れておこせたり、めづらかにて、とくわらはよびてはな
たせつゝ、なほながめをるに、もとよりのにやあらむ、いままゐりの

(二)
國學者。本居宣
長の門人。安政
六年歿、年六十
九。
江戶國人

國學者。村田春海の門人。文政七年歿、年四十九。
江山人

にやあらむ、かつく鳴きいでたるいと興あり。月さしのぼりては、
まして音もすみゆくにはるけき野べまでおもひやられて。(柳園集)
清 水 濱 臣

近しと聞けば遠く遠しと聞けば近し。しきるもたゆみたゆむも
またしきる。雁がねの聲の擣衣を誘ふにやあらむ。擣衣の音の雁が

蹟筆臣濱水清

ねをさそふにやあらむ。あなあやしあなあやし。そのこの音の悲し
きか、住む里のさびしきか、擣つをりのうきゆゑか。皆あらず、聞く人
の心のわびしきなり。(泊酒文藻)

二〇 霧の倫敦

野 口 米 次 郎

詩人の目うつる倫敦

慶應義塾大學教授。ヨネ、ノグチとして歐米にも文名あり。
明治八年生

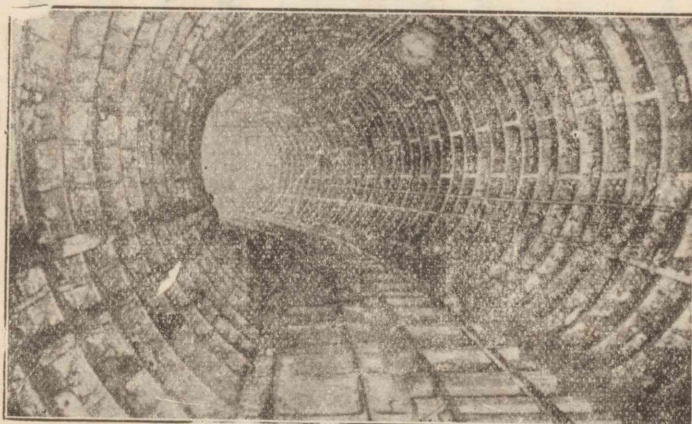
Thomson
スコットラ
ンドの詩人。
(二七〇一
一七四八)

むっかしい現法
倫敦のまじりか
あり詩的の美あり
又西務ルン層美あり

十年目に再び見た倫敦はトムソンが歌つた、恐しい夜の都會自
身——霧の倫敦であつた。

それから一週間ばかりは朝から所謂霧の倫敦で、其の頃僕が書
いて倫敦のウエストミンスター、ガゼットに寄稿した小品文中に
こんな文字が発見せられる。

「僕はある朝モニメント停車場を出て、ビショップス、ゲート
(倫敦の町の名前位興味深いものは無い。京都の町の名前以上
だ)をさして歩いた。ほて／＼して魚か何かのやうに泳いででも
居るか、疑はれるやうな霧が、狭い道路を流れて居る。頭を擧げ
ると、兩側の高い建物が丁度耳語でもして居るかと思はれる程
度に、双方から肩を接近させて居る。そして霧の中を金に饑ゑた
魍魎魍魎が走つて居る。これは冬の倫敦で最も特徴ある光景の
一だと思ふ。それから更に僕を動かした一光景を語りたい。ペー



ロンドン地下鐵道

スウォターの一友人に晩餐に招かれて、夜おそくランカスター、ゲート停車場で地下鐵道の列車を待った。地下幾千呎といふ穴の中で、夜が更けて居るから乗客は一人も居らぬ。僕はこの時未だ感じたことが無い不思議な、僕の皮膚をみしむし噛むやうな沈黙に觸れた。この沈黙は自然が産んだ沈黙で無く、近代科學的組織力が産んだ不自然な沈黙である。若しや出る穴が突然塞がれたならば、僕はごうするであらうと戰慄した。此處はきつと地獄へ近いであらうとも思つた。深夜の地下鐵道の沈黙——これは近

代の新詩人が歌ふ好題目だ。諸君さうは思はないか。——
 倫敦の冬に霧が無かつたならば、倫敦の建物は何んなにその美觀を減ずるであらうか。僕が滞在した旅館の附近に、まづ第一に國民美術館がある。それから僕が倫敦の寺院中で一番好きなきセントマーチンズ、イン、フキールドがある。この小寺院は建築上から論じてても倫敦きつての建物として尊重すべきものだ。それに加へて霧に包まれた場合には、何んなにこの小寺院が夢のやうな非現實な麗しい趣を添へるであらう。大英博物館の如きも等しく冬の霧の恩恵を多大に受けて居る。霧があればこそ、その建築に薄黒い滋味が付き、霧を通じて見ると、如何にもそれが莊嚴に又氣高い印象を與へるのである。僕は、冬の霧の大英博物館を見舞つて、思ひもよらぬ稀有な光景を見る機會を得た。僕がその圖書館へ踏入つた時、僕は、英國人と産れてこれ等の書物を手に觸れ、且含まれたる眞理

Thackeray

英國の小説家。一八一—一八六三

を味はふことが出来るに對し、心から祈禱を捧げた、とかいつたサ
 カレーを思ひ出した。今僕は支那學者として有名なジャイルス君
 と一所に、諸文豪の名前が刻してある圓天井へと段々を上つて居
 ると思ひ給へ。かういふ高い場所からずつと下の讀書室を眺めお
 ろした光景だ。霧の冬のことであるから時間は四時前後であるに
 係らず、幾百といふ青黒い笠を冠つた電燈が點いて、それが机の上
 へ丁度小さい水溜りのやうな影を落して居る。實にそれは美觀で
 あつた。頭を上げると世界に二つとない巨大な圓天井が沈黙を包
 んで居る。僕は實際この壯觀と麗しい驚異に撃たれて、一時神經を
 失つたといつても決して誇張でないと思ふ。併し時が霧の冬でな
 いならば僕の感じはかく嚴肅な莊重なもので無いに相違無い。僕
 は冬の倫敦を詳細に見た事を感謝するものである。霧の冬の倫敦
 には人を動かす莊麗な光景が多いのである。

陽気
 春の霞のやうな深い霧が懸つた日、僕が一所にホルボーン、サー
 カスの活動を僅か幾百碼離れたリンコルンス、イン、フキールドへ
 急いで見給へ。この靜寂な一小公園を別に用事としては無く自由に
 彷徨ふと奮闘的の人生の幹流から故意に分れて出世間的な獨りよ
 がりの貴い味を嘗めて居るやうな感じがする。此處にある葉の無
 い冬の樹木は淺霧が棚引いて居るために時ならぬ紫色の花を咲
 かして居る。これを譬へると差詰め蓬萊山の繪である。眼前の光景
 が陽炎のやうに軽く又浮動する香氣の如く自由である。夢が不思
 議な影と合體し、記憶が歌の音律に揺れる蜘蛛の巢のやうに現實
 と非現實との兩境に懸つて居るとも批評することが出来る光景
 は、即ちこの「殘霧のリンコルンス、イン、フキールド」だ。倫敦にはこの
 種の小公園、其處には人情化した小さな樹木が一杯生えて、殆
 ど個人的に近い空氣を持つた小公園が澤山造つてある。日本の東

Samuel Jonson

英國の文學者。一七〇九—一七八四

京のやうな粗末なバラック型の都會とは違ふ。東京などは日本(西)洋人に云はせると美術的な日本の帝都といふ資格は無い。倫敦の小公園の中を歩くと、我々臨時の訪問者は特別の許可を得て圍れた貴族の内庭でも見て居るやうな感じがする。

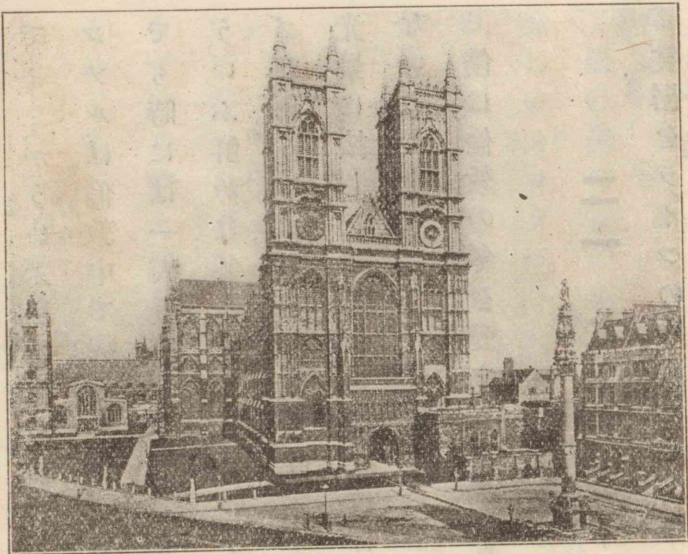
併し倫敦も段々米國化(米國の物産主義)する運命を持つて居ると見えて、いつまでかういふ精緻な麗しい空氣を維持し得るであらうか。他處はさして措き、テンフルと稱せられて居る一郭だけは近代的騷擾(騷擾)を感じしめたくない。此處に古い灰色の四角形の中庭がある。又此處に芝生の中からぶく／＼泡吹く泉水がある。如何にも十八世紀の文學的歴史が、所謂十字軍の思想とまじつた大學町の香氣が豊かに残つて居る。霧の冬、この古色掬(ハキリ)すべきテンフルを散歩すると、どんなに荒涼たる悲哀に撃たれるであらう。いつも老ジョ(ジョ)ンソンの無遠慮な皮肉の槍玉にあげられた憐(ミゼラブル)なゴルドスミス(不器量な男であ

Charles Lamb

英國の文學者。一七七五—一八三四

Goldsmith

英國の文學者。一七二八—一七七四



院寺一タスンミトスエウ

つたが、虚榮心の強い、衣裳道樂で青いけば／＼しいチョッキなどを着こんで駝鳥の恰好で歩いたと聞いて居る。が、此處に永眠して居るが、死んで迄もウエストミンスターで老ジョ(ジョ)ンソンの側に居るよりは結局愉快に思つて居るであらう。僕の愛するチャールス、ラムはかう書いて居る。何たる愉快な寛裕な外觀(外觀)が此處にある。三方面から此の中庭を眺めて居る古色莊嚴な建物は、ハーコートと名付けられて居る輕快喜ぶべき建物と相對し

Symonds
英國の詩人。一八四
五—一八九
三

Rhein Loreley
獨逸の河の
名。

て僕の生れ場所である陽氣なクラウン、オフキス、ロウもこの附近
で……、かういふ場所に産れるといふことは可なりの大事件だ。『テ
ンプルは倫敦中で一番香氣の高い特色を持つた一郭だ。倫敦の冬
でも時には一天澄渡つて玲瓏玉の如き月が輝く夜もある。僕はさ
ういふ鮮かな冬の月夜にこのテンブルを獨り歩いて、詩人シモン
ズが『啜り泣する月へ、涙の呼吸を、庭が吹きかへす。』と歌つた實際の
光景に接したことがあつた。僕はその夜を今に忘れることが出來
ない。

僕は倫敦の冬を愛する。(霧の倫敦)

二一 獨逸の巖

東岸を流る、
裳裾をラインの緑波に洗はせて、巨人の蹲る姿に、ぬつと突出た
絶壁の巖の鼻に、女が坐つて歌を謡つて居る。川風に漂ふ金色の髪

Melody
曲調。

を黄金の櫛で梳り梳り、美しい聲に謠ふ。歌は呪の歌、女は美しい水
の精ローレライである。

巖の鼻に女の姿を見懸けぬ人は幸である。波の上を渡つて來る
美しいメロデーに耳を貸さぬ人は救はれた人である。或時は、巖
の上に女の姿の見えぬ事もある。居らぬかと思ふと、何時の間にか
金色の髪が川風に流れて居る。夕陽が巖の頂を血の色に染めなし
て、ラインの水が巖影を浸して暗綠色に淀む頃、女は殊に好んで美
しい呪の歌を唱ふ。

下行く舟人は、ローレライの歌聲に聴きこれ、何時しか行方も知
らず舵を絶え、巖角に舟打付けて溺れるものもある。危き渦に捲込
まれて沈むものもある。呪の歌、呪の舟路と言ひつたへ、人はローレ
ライの巖の下を行く事を怖れる。
或時フアルツ伯爵家の公子ルードウキヒが、此のローレライの

巖の下を舟に乗つて通り懸つた。彼も亦多くの犠牲者と同じく呪の歌に聽入つて怖しい渦に捲込まれ、舟は碎け、公子自身は泡立つ波の下にあはれ藻屑と沈み終つた。

愛子の非業の最後に、非憤遣る方なきファルツ伯は、憎き妖女、我が子の仇、おのれ此の儘に置くべきか、家臣なるデイーテルと呼ばれる剛勇の武士に一隊の兵士を率ゐさせ、ローレライを退治しにと差向けた。

デイーテルは部下を指揮して、八方から岩を取圍み、じり／＼と攻寄せて巖の鼻へと迫つた。折柄雲間を洩れる片破月の蒼白い光を浴びて、ローレライは常に居る巖角に何心なく坐し濡れた髪を寶玉の紐で結びつゝ、好みの歌の一節を口吟んで居た。忽ち近き人の氣に、女は驚いて立上つた。

「何用あつて此處へは。」

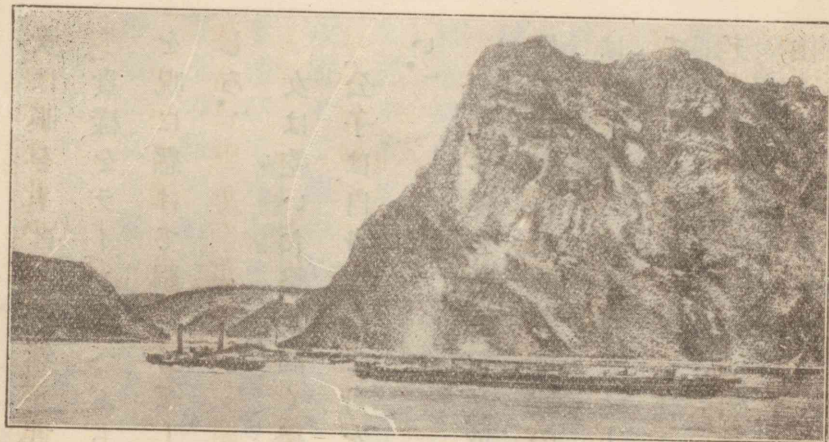
女は眼を上げて儼然と武士を見据ゑた。

「貴様をライン河へぶち込んでやるためだ。よくも、我が若殿を呪に懸けて溺らせてしまつたな。いで其の仇を打つて遣る。覺悟しろ。」

女は乾いた聲を高く揚げて笑つた。

「公子は自身の過で舟を沈めて死んだのだ。私の知つた事ではない。」

丈なす髪を波打たせ、危き斷崖の巖鼻に、すらり身を伸ばして月に微笑む女の姿は、此の世のものならぬ美しさに、物凄くさへ思はれた。ならば手捕にもして呉れんと氣負つて居た勇士等は、却つて彼の女の強い呪に懸けられて、身動きも出来なくなつた。剛勇のデイーテルさへ、心は彌猛と逸れ、物言ふ事すら叶はず、身體の自由を失つて立竦んだ。



「データール、未だ私を河へ投込むこ
とが出来ると思つて居るのほゝゝ、
私の方から行かないでも、ラインが迎
へに来て呉れるよ。」言ひつゝ、女は徐に
一 寶玉の紐を髪から解いて、河に向つて
レ 投げた。忽ち靜かなる月の夜は、凄じい
テ 嵐の夜と變つた。波は逆捲き、岸に溢れ、
イ 高いローレライの巖の上まで白い泡
の沫が沸きあがつた。三頭の白馬の形に
巖 捲きおこつた怒濤の渦の中へ、女は徐
に歩み入つた。波は彼の女を乗せたま
ゝ、空をも打てと揺りあげたが、又見る
間に低く引去つてしまつた。ローレラ

イの姿は此の時はや幾重の波の底に沈んで、再び見る由もなかつた。

やがて嵐も歇み、武士に罹つた呪も解けた。彼等は二度とかゝる使命に就かん事を思ひ断ち、纒かに一身の安きに甘んじて、忽々引上げて行つた。女の呪の歌はかくて絶えたけれど、ローレライの巖は今尚巍然として、ラインの右岸に巨人の様な姿を遺して居る。

(松山淨著傳説のラインに據る。)

* 文學者。

(目録) 村上先生の前途の描写

二二 鳴咽

エウ、エウ

* 加藤 武雄

村上先生は師範出でもなく、この縣の人でもなかつた。長い間東京にゐて、或私立大學を出た人であるといふ事の外、何人も彼についてには知らなかつた。准教員の免狀しか持つてゐないが、學歴が高いといふ事と、教授に熱心であるといふ事の爲に、この學校でもか

なり重んぜられてゐた。併し非常に陰氣な、變屈な、ろく／＼人と口も利かぬこいふ風な人間なので、何人からも親しまれなかつた。どういふ事情でこんな處へ來てこんな事をするやうになつたか、この疑問は初の中はかなり同僚達の好奇心を惹いたが、彼はさういふ事については決して語らうとしなかつた。

ひよろ長い身體、瘦せこけた顔、身體のごこの部分にでも露出された神経が始終びり／＼と顫へてゐると言つたやうな男で、神經質で癩癩持だつた。教授に熱心で、子供に對する注意もよく行届いて、この點では評判がよかつたが、併し時々癩癩玉を破裂させるので、生徒からは怖がられてゐた。

村上先生は、去年の第二學期からこの學校に出はじめたのだが、その時から尋常五年生を受持つた。

その尋常五年生でも、熊吉は持てあまし者になつてゐる劣等生

三の教をなす射先を
多々増
熊吉の體質

であつた。尋常五年になるまでに、熊吉はもう二度も落第してゐるので、年齢から言へば級中第一の年嵩であつたが、小柄なので、脊丈順では中以下にゐた。色の白い丸顔の、濃い地藏眉、その下にはつちりと開いた黒い眼、その眼の働に多少の敏活さがあつたら鼻から上は人並以上にも見えるのだが、少し反齒の、始終開け放しの、縮りの無い口元のおたりに、隠す事の出来ない遲鈍の徴があつた。一體に發育不良で、體力も弱かつた。眼尻の所、丸い小さい鼻のそばかすのある鼻梁の所に、始終細かな人の善い笑を波打たせながら、年下の者にまで馬鹿にされて、いゝやうに押廻されてゐた。運動場では仲間から離れて、一人で地面に穴を穿つたり、櫻の樹の樹脂を取つたりしてゐる事が多かつたが、時々友達に引張り出されて馬にされたりなごして、泣きさうな顔をして地面を這廻つた。ごんな虐げをも愚かしい微笑で受流してゐたが、堪へられなくなつ

て聲をあげて叫び出す事もあつた。その聲が驢馬に似てゐるので、「驢馬」といふ綽名がついてゐた。この驢馬の叫はこの學校の運動場の一つの景物であつた。

教室での熊吉は、又別個の愛嬌者であつた。彼は、教へらるゝと共に忘れ得るゝ共に失つた。窓に面した側の、中央より少し後に彼の席はあつたが、彼は、少し猫脊にして、置物のやうに首を据ゑ、睜つた眼を半開の口を以て凝と教壇に對してゐた。傍見もせず、囁きもせず、この點では模範的と言つてよかつたが、その身體の固著してゐるのゝ同様に、彼の頭や心もすつかり固著して、少しの動きをも持つてゐないらしかつた。

ごんな平易な問でも、熊吉には直ぐに返答の出来るものは無かつた。熊吉は性來の猪首を一層前に突出すやうにし、ごくりと唾を嚥んで眼を閉ぢる。さうして、何か呪文をでも稱へるやうに、忙しく

唇をもぐ／＼させる。先生はわざと性急に疊みかける。熊吉はもう眞赤になつて、すつかり度を失つてしまふ。さうして、二振三振激しく首を掉るかと思ふと、寧ろ喚くと言ひたいやうな高い聲を――少し鼻にかゝる、甲高な肉食鳥を思はせるやうな鋭い聲を放つ。この聲がかなり突飛なものである上に、その答が、殆ど例外なしに、思ひ切つてとんちんかんなもので、勿論、ごく稀には、正しい答をして人々を失望させることも無いではないが、待構へられた笑が一齊に教場に湧上る。その笑の大波の中に愈眞赤になつた、今にも泣出しさうな熊吉の顔だけが、便りなささうにふら／＼と揺れてゐる。

こんな風で、教室に於ける熊吉は、一箇の道化役者としてののみ動きを與へられた。この先生も、眞面目に熊吉を相手にしなかつた。先生が教授時間の單調に倦んだり、何か不機嫌の漏し處を求めたり

村上先生の事件

する場合にだけ、熊吉は、言はば餘興の爲に引張り出されるのであつた。

が、村上先生が熊吉の級の受持となつてから、熊吉は全く一變した状態に置かれた。村上先生は第一に仲間が熊吉をいぢめる事を絶對に禁じた。驢馬の受難に一種の激しい義憤を感じた村上先生はその暴虐者に對して決して容赦をしなかつた。校長はじめ他の先生達に對しても、熊吉いぢめに對する寛大について、むきになつて抗議した。同時に教場でも、村上先生は熊吉をその注意の外に置かなかつた。彼の過敏な苛^だ立ち易い神経は、自分の前にぼんやりと捧げられた不得要領な顔付を見るに、びり／＼と慄へ出さずには居られなかつた。教へられた事を直ぐ忘れたり、説かれた事を全く別のものにして受取つたりする不思議な機械のやうな熊吉の頭が、村上先生を堪らなく苛立たせ悶えさせ喘がせるのであつた。彼

は殆ど時間毎に鞭を持つて熊吉の傍に立つた。さうして、ぴしりぴしりと机の上を叩きながら、之が癩癩を起した時の村上先生の癖であつた。何度も何度も同じ説明を繰返し、同じ質問を繰返した。幾度繰返しても、熊吉にはわからなかつた。熊吉は極めて執拗にわからなかつた。村上先生のわからせようとする努力も、それに負けずに執拗であつた。彼はその口の中に手を突込んでも、必ず求める答を引出さずにはゐられないやうな激しい焦躁に支配された。逆も駄目だ。もう抛つて置かうと思つて見ても、ごうも氣になつてそのまゝにはして置けない。彼は熊吉の顔さへ見れば、それをつゝかすにはゐられなかつた。つゝかすにゐられなかつた。云ふよりも、熊吉からつゝかれずにはゐられなかつた。と言ふ方が正しいかも知れない。

かういふ事があつた。去年の暮、第二學期末の或日の事である。第

村上先生の事件

* After image

殘像ともいふ。

二時間目の算術の時間に、村上先生は例のやうに熊吉の机の傍に立つてゐたが、加速度的に高じた苛立たしさの果てに、急に激しい怒りに引摺られた。

「馬鹿！ 彼はかう怒號しながら、手に持った鞭を力一杯その頭に打下した。熊吉はわつと泣出したかと思ふと、彼に似合はぬ敏捷さで席を飛びのき、廊下に逃出して校庭に飛下りるや、火の附くやうな泣聲を後に引いて、磔のやうに裏門から走つて出た。村上先生は、極度の恐怖に怯えながら凝ここちらを見上げた二つの眼と、同じその刹那に、はつと眼の前に漲つた方一尺ほどの赤い靄（アフォーイミ）の後象を強ひて搔きのけるやうにしながら、あんな低能な頭からでも、矢張赤い血が出るから妙だ。は、は、は、と顔を引歪めて、毒々しく、冷たく笑つた。

我に返つて見るに、生徒等は皆激しい恐怖に凍りついたやうな

顔をして、こそりこもしないで凝こ此方を見つめてゐた。村上先生はそれを見て、もう一度にや／＼と愚かしい笑ひ方をしたが、教壇に戻つて卓の左右の兩端に兩手を突張つて、教科書の頁の上に屈みこんだなり、五六分の間は一言もものを言はなかつた。彼はぶるぶると慄へてゐた。さうしてその眼には涙が一はい溜つてゐた。

その日村上先生は、午から早引にして自分の寓居に歸つた。さうして頭から夜具を被つて寝てしまつた。少し熱もあるやうで、頭（こゝろ）の心がいひやうもなく惱ましかつた。彼は自責にその心を噛まれた。俺は何といふ事をしたらう。俺は自分の生徒を擲つた。さうして傷をつけた。それも癩癩紛れに擲つたと言へば言へるやうなもの、併し考へて見れば俺はあの時明らかに憎惡を持つて擲つたのだ。明らかに抑へ難い憎惡を意識しつゝ、擲つてやれと思つて擲つたのだ。俺は何といふ事をしたのだらう。それに續いて、或俛（うつむ）れが彼を

「熊吉が御厄介になりました。かう言つて、繼徳もなくびよこんと頭を下げた時は、村上先生は、皮肉に出たなと思つたが、相手は續いて、今日はまたあれが逃げて來たりなんぞして、あれの馬鹿にも困ります。ま、どうぞ眞平御勘辨を願ひてえで。」言つて、心から恐縮したやうにもう一度頭を下げた。

村上先生の心は急に混雜し出した。いや、私も癩癩持なんのでつい手荒な事をして。」と、獨言のやうに呟いた。

「なあに、あなた覚えさして下さらうとおもやこそ、打つても下さるだ。わしあ、今日うんとあれに叱言を言ひました。打つて下さる程有りがてえと思へ。何でわりあ逃げて歸つたりなごしたあつて。熊吉の父親は次第に勢づいた調子になつて、かう申しちや何ですが、先の先生方、うちの奴を唯なぶりものにするだけで、眞面目に教へて下さらうつて方あ無かつた。村上先生、あんたあ、あんな奴でも見

限らずに、人並に教へて下さる。わしあ何ぼう有りがたく思つてゐるかわからねえ！」

熊吉の父親は、迪々しい言葉つきながら、かなり雄辯であつた。彼は、自分の息子の出來の悪いのを嘆いた。自分も矢張子供の時學校の出來が悪かつた事、熊吉の出來の悪いのは親譲りなのだから親として責任があるといふやうな意味の事を語つた。それから彼は、自分が學問が出來ない爲に貪慾な姉夫婦に財産を横領されてしまつた事、どんな事をして、熊吉には高等小學だけは卒業させた。い念願である事、熊吉が落第する度に姉から手ひどい嘲笑を受け、る事、現に二三日前も姉から、熊吉は學校でも持て餘されてゐる。いくら學校へやつても何にもならない。今度の試験も落第に定つてゐるからもう學校をさがらせて宅へ小僧奉公によこせ。」と言はれた事、そんな事を何一つ隠さずに話して、自分がいかに熊吉の教育

に熱心であるかを述べた。だから、わしあ、野良へ出た序に、一寸學校へ寄つて教場の窓からのぞいて見た事があるですが。先の先生の時にや、何時見てもあいつは笑ひものになつてゐる、なぶりものになつてゐる。わしあ、それを見ると腸が煮えくりかへるやうな氣がしたのでがす。」と言つて、彼は膝小僧の端の出た膝を兩方の拳で抑へて、教員つてそんな筈があるもんぢや無い。いくら御馬鹿にしろ、矢張生徒だあ！ねえ先生、さうぢやありませんか。だが先生は眞面目に教へて下さる。あんな奴でも愛想を盡かさねえで、わしあ有りがた涙をこぼしてゐるだ、先生、なあに、いくらぶつはてえて下すつても構はねえ、遠慮なくやつて下せえ。頭の一つかけや二つかけ吹飛んだつて、それが何だんべえ。熊吉にもよく言つて聞かすですが。さう言つて、熊吉の父親はその眼に涙を浮かべた。この親父の涙は村上先生の心の底まで沁みこまずにはゐなかつた。

村上先生の
熊吉の
父親の
涙

その事があつてから、村上先生と熊吉との交渉は一層密接なものとなつた。村上先生は、この哀な親を持つた哀な子に深い愛を感じるやうになつた。村上先生は、唯自分の神経に引つか、つて、そつとして置けぬからといふ以上、ごうかものにしてやりたいといふ積極的な意志を加へて、熊吉の前に鞭を執つた。熊吉の「何處かへ魂を半分おき忘れて來た。」といふやうな、ぼんやりとした様子の中にも、一所懸命のうごめきが見てとられた。

「しつかりしろ。な、お前のお父さんはあんなに本氣になつて居られるのだ。申譯がないぞ！」と言ふ時、熊吉のぼやけた精神もひきしめられるやうに見えた。同じ言葉で、村上先生は自分自身をも鞭うつた。是非ものにしなければあの親父に申譯が無い！」

村上先生は隔日に一二時間づつ、熊吉を留めて置いて課外教授をする事にした。今まで熊吉の級を受持つたごの先生にしる、熊吉

を眞面目に教へようとしたものはなかつた。二年目に一度づつ落第させる、さうして一級を二年やらせた後は出来ても出来なくても御情で進級させてやる、之が熊吉に對する學校の方針であつた。ところが村上先生は眞面目に熊吉を教へはじめた。

村上先生はもう教場では熊吉を指名する事はしなかつた。熊吉が例のとんちんかんな答で他の生徒達に笑はれる時、彼は自分自身が笑はれたやうに思はれたから、熊吉もその激しい癩癩におびえながらも、村上先生によくなつた。課外教授を終へると、村上先生は熊吉と一緒に家に歸る事があつたが、さういふ時、熊吉は主人を守る犬のやうに、後になり先になりしてころ／＼と歩いた。熊吉は、先生と自分との特別な關係を、ひそかに仲間に誇つてゐるやうにも見えた。

校長や首席訓導がひそかに心配しはじめたやうに、この課外教

授をはじめてから、村上先生は目立つて身體の工合が悪くなつたやうに見えた。實際村上先生の健康では一日四時間の定め、の時間でさへ多過ぎるのに、その上更に二時間、而もその二時間は、彼の弱ヤウヤウな全神經をずた／＼に引きちぎらなければならぬ。二時間であつた。苛立ち、悶え、怒り、罵り、その偶像のやうな低能兒の前で、夢中になつて一種の氣狂じみたダンスをやらねばならぬ。二時間であつた。勿論、多少の効果は現れたが、この低能兒にもものを教へる事は、畢竟酬いられぬ努力に過ぎなかつた。

「とても駄目だ。無駄な事だ。」と、彼は幾度も鞭を投出した。親父の頼み、併し仕方がない。一體無理な頼みなのだ。あの親父、奴態ヌグテと俺を苦しめようとして俺にこんな義務を負はせやがつたのだ。こんな事も思つて見た。馬鹿！お前は本當に驢馬だ！驢馬以下だ。もう學校へなんぞ來るな。歸れ！こんな事も言つて見た。だが併し、實際

はだん／＼抛つて置けなくなる度加るだけであつた。熊吉のぼんやりした顔を見る、もうそれ丈で村上先生の神経がいら／＼し始めるに十分であつた。その毛の細かな少しいびつな圓い頭、
 教へられた事を直ぐ忘れてたり、説かれた事を全く別のものにして受取つたりする、不思議な機械のやうなその頭を見ると、一息に打挫いででもしまひたいやうな焦躁に驅られずにはゐられなかつた。今はもう、寝るにも起きるにも、一瞬の間も熊吉の事を忘れてゐる事が出来なくなつた。夢にさへ、よく熊吉の夢を見た。——何か聲一杯叫びながら、地だんだ踏んで鞭を振廻してゐる。熊吉は笑つてゐる。堪らなくなつて、鞭をあげて撲つ。撲つても撲つても彼はへらへらと笑つてゐる。——こんな夢を始終見た。夢が覺めると盗汗が出てゐた。この頃では毎晩盗汗が出た。

村上先生の態度が、熊吉の心を打つた。その時の教へ方。

今日も村上先生は、極めて穩かな態度で物靜かに始めた。自分の神経を萬遍なくなだめ鎮めるやうな心持で、自分の氣分を壊すまいと、息さへ荒く吐かぬやうな用心深い心持で、彼は顔色を和げ言葉を優しくして問をはじめた。なるべくやさしい問を選んで、どうぞ無事に答へてくれ、ばよいがと祈りながら、寧ろ哀願するやうにしなが、その問をはじめた。

少くとも最初の五六分間は、思ひ通りに、靜かに穩かに進行した。けれども少し経つと、もういけない。あ、もういけない。村上先生が、やうやく亂れ苛立つて來る自分の神経を他人事のやうに見て、はら／＼する時分には、熊吉はもう十分狼狽しきつてゐる。彼は自分の忘れつほい事よりも、物のわからぬ事よりも、さうした自分の甲斐無さから、それほご自分の爲に熱心になつて教へてくれる先生を失望させ、苦悶させるのが辛いのであつた。そのぼんやり

とした心にも、毎日毎晩父からいひ含められてゐる村上先生の有り難さは深く沁込んでゐて、これだけの心持は働くらしかつた。熊吉は憐みを請ふやうな詫びるやうな、おご／＼した眼つきで凝と先生を見る。その眼は幾分か先生の昂ぶり行く心を押鎮めるに役立つた。

「出来ないかな。これは少しむづかし過ぎたかも知れないな。ぢや……」村上先生は次の問題を出した。静かにやつて御覽心を落著けてね。何でも落著いてやらない。こいけないよ。」と先生はわざとらしいまでに優しい調子で言つた。それは相手に言ふよりも寧ろ自分自身に言ふ言葉であつた。

併し熊吉は矢張出来ない。こんな事を二三度繰返す間に、村上先生の額には濃い膏汗が滲み出て來た。顛顛の靜脈がひく／＼と動いて來た。彼はみす／＼、狂暴な焦躁にまで驅り立てられて行く自

分をどうする事も出来なかつた。

「まだわからないか。昨日あれほどに教へたのに。ほんこに貴様は驢馬だ！驢馬以上だ！馬鹿！」と彼はその鞭をぴしりと熊吉の机の上に打ちおろした。熊吉はもうすつかりおご／＼してしまつてゐる。さうして鉛筆を持つた手をノートブックの隅の處でみぢりわな／＼かしながら、大粒の涙をほたり／＼とその上に落してゐる。大きな口の兩端が少し上に彎曲して、口角の處に深い皺が出来、兩方の眼と鼻梁とが一つ處に引寄せられて、その充血した顔の全體は蟹の甲のやうな奇怪な形になる。それを見てゐる村上先生の心の中には、妙な考が浮かんで來た。その顔をもつて奇怪な形に歪ましてやれ、こいふ考である。

「馬鹿だな。ほんこに。いくらお父さんが本氣になつても、先生が本氣になつても、馬鹿な奴は矢張駄目だ。明日からもう學校は止めて

しまへ！彼は憎々しげな、冷たい口調でこんな事を言った。

熊吉は思ひ通りにその形を一層奇怪に引歪まして見せてくれる。両方の眼がぎゅつと引寄せられると共に、閉ぢた瞼の間から涙の玉が後から後からさいくつも轉げ出る。それをさも面白い観物でもあるやうに、彼は凝と眺めてゐる。

そこには明らかに變てこな享樂があつた。彼は何時の間にかこの慘酷な興味に引きこまれて、意地の悪い事を言つて散々熊吉をこづき廻してゐる自分に氣がついた。

さうした自分に氣がついた時ほど、彼は自分自身が悲しくなる事はなかつた。俺は親切な先生ではない。質たちの悪い暴君なのだ。この弱者の俺が、暴君なのだ。

この自責で、彼は最後の熱心を絞り出すべく勵まされる。彼はもう一度氣を取直して、新しくやりはじめなければならなかつた。

「本氣になつてやらないと、熊吉お父さんに濟まないぞ。お父さんはあんなにお前の事を一所懸命になつてゐなさるのだからね。先生だつてお前をものにしなければお前のお父さんに申譯が無いのだからね。さあ、算術はやめて、今度は讀方にしようか。」

かうして熊吉は涙を拭いて、今度は讀本を取出すのであつた。併しそこでもまた前と同じ經過が繰返されなければならなかつた。「馬鹿、もう忘れたのか、馬鹿！」また激しい怒りに引摺まれて、喰ひしばつた齒の間から押し殺したやうな罵聲を吐出しながら、燃えるやうな眼を熊吉の額に投げつける。再びさういふ光景を繰返すまでに多くの時間を要しなかつた。熊吉はもう、すつかり途方に暮れて唯おご／＼するより外はない。

村上先生は椅子の上にくつたりと身を投げかけた。實際、彼はすつかり疲勞してしまつた。もう日も暮れ、窓かけの襖が黒い條を描

いて、室の隅々には濃い隈が出来た。

村上先生は、その黄褐色の埃つほい黄昏の光に浮いた熊吉の輪郭のぼやけた顔を見てゐる中に、今度は妙な幻想じみたものに捕はれた。熊吉は途方に暮れてゐる、さうしておどろくしてゐるが、その魂の抜けたやうなぼんやりした表情は、一種の空っぽけてゐるやうな印象を村上先生に與へた。さうして、恐しく意地の悪いものがこの小さな身體の中に巢喰うてゐて、故意に自分をなぶらうとしてゐるのではないかといふやうな氣がして來た。例へば自分の運命といふやうなものが、この小さなぼけた人間に形をこつて、今自分の前に立つてゐるのではなからうか。それは、自分の望む事は何一つ受附けてくれない、自分の欲するやうには何一つ答へてくれない。わかりきつた事をわからぬものにしてしまふ。さうして、徒に自分を悶えさせる、苛立たせる、苦しませる。

村上先生は熊吉のぼんやりした顔を見つめてゐる中に、また凝さしてはゐられなくなつて來た。彼は再び立上つた。

「では、いゝか。もう一度讀んでやる。しつかりとあとをつけて見ろ。」かう怒鳴るやうに言つて、彼は熊吉の前にひろげた教科書の文字を鞭の先でつゝきながら、暗くなつた光に透かすやうにして音讀した。

「胸ノ左右ニハ肺アリ。肺ハ鼻口ヨリ吸ヒ入ルル空氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。」村上先生の聲は、空しい教室の黄昏の空氣を震はして、高く硝子戸に反響した。その甲高に上ずつた聲の餘韻は、妙な啜り泣のやうな響をもつてゐた。

「胸ノ左右ニハ肺アリ。肺ハ鼻口ヨリ吸ヒ入ルル空氣ヲ以テ血ヲ清潔ニス。」と、熊吉も涙ぐんだ聲を高く張上げてそのあとをつけた。「兩肺ノ間ニ心臟アリ。心臟ハ肺ヨリ來ル新シキ血ヲ全身ニ送り、

又、身體各部ヨリ歸り來レル血ヲ集メテ之ヲ肺臟ニ送ル。さあ讀んで御覽。」

熊吉は讀出した。兩肺ノ間ニ心臟アリ。心臟ハ肺臟ヨリ來ル新シキ血ヲ……

そこでつかへてしまつた。

「馬鹿！」村上先生はまた大きな聲で怒鳴り出した。机の上の本を鞭の先で叩き落された熊吉は、机の板に喰ひ付くやうにして、しくしくと泣出してしまつた。

村上先生は椅子の上にぐつたりと腰をおろした。さうして凝と眼を閉ぢた。

唱歌教室の方からはA女教師の思郷の歌が、まだその懶い單調なしらべを送つてゐた。

二三分、村上先生は凝ささうしてゐたが、その中に先生の心はし

みんゝとした悲しみで湛へられて來た。悲しいと言はうか、情ないと言はうか、何とも言へない心持になつてゐた。俺はこの憐な奴を、何だつてこんな風に慘酷にいぢめなければならぬのか。村上先生は、堪らなく熊吉が可愛さうになつた。同時に、堪らなく自分自身が可愛さうになつた。ふと眼を開いた村上先生は、熊吉の方へ椅子をすり寄せて、

「熊吉！」と呼びかけた。

熊吉は涙に濡れた顔をあげた。彼は、その兩手の手首を自分の兩手でぐつと握つて、

「熊吉！」と再び呼びかけた。さうして優しい聲で、お前は先生が怖いかい？」と訊いた。

熊吉は、ちらと彼の顔を見ただけで黙つてゐた。熊吉は質問に對する返事の外には、絶対に口をきかぬと言つてよい位無口な子で

あつた。

「熊吉、お前は先生がきらひだらうな。苛めてばかりゐるからな。」
熊吉は強く首を左右に振つた。さうして先生の顔を凝と見た。物言への動物のやうなその眼は、かう言つてゐるやうに見えた。嫌ひだなんて、そんな勿體ない事をどうして思ひませう。私の爲に骨折つて下さる先生を、私は始終有り難いと思つてゐます。けれども、私にはどうしても覚えられません。わかりません。私はそれが悲しいのです。……辛いのです。……」

熊吉の眼からこれだけの意味を讀取つた村上先生は、熱い涙を臉に感じた。さうして一層強くその手を握りしめながら、心の中で言つた。

「熊吉、お前を苛めてすまない。勘辨してくれ。俺とお前は、かうして苛めつこをしなければならぬやうに運命づけられてゐるのだ。」

お前も俺も同じやうに呪はれた人間なのに違ない。

お前も苦しからう。俺も苦しい。二人は屹度、何かの因果同志に違ない。
村上先生と熊吉とは闇の迫つた室の中で、暫くさうして手を握り合つてゐた。村上先生は、この低能の少年と自分との、二つの心がぴつたりと一つになるやうに思はずにはゐられなかつた。さうして、この世の中にお前と俺とたつた二人きり！と思はずにはゐられなかつた。

「あゝ、けふも遅くなつたね。氣をつけておかへり。」と、やさしい聲で、熊吉を見送つた村上先生は、疲れ切つた體を職員室まで運んで歸つた。職員室には校長だけが残つてゐた。大火鉢には火が眞赤におこつて、その火の光が、やうやく人の顔の見わけがつく位の明るさを漂はしてゐた。

村上先生がはひつて來るのを見るに、

「やあ！御精が出ますな。」と校長は快活に聲をかけた。

「なか／＼お骨が折れませう。まあ、火の傍におよりなさい。校長は重ねて聲をかけた。

「え、彼は氣の無い返事をした。

「どうです。些とは進歩が見えますか？」

「え、些とは……」と彼は素氣なく云つた。何か擲諭はれてでもあるやうで、腹立たしかつた。

「S君も心配してゐるんだが、——私もいつか君に云はうと思つてゐたのだが、——ねえ、村上さん、いつそ思ひ切つて了つたらいかがでせう。勿論君の御熱心には感服してゐる。校長として、私は十分有り難く思つてゐる。その御精神は失禮ながら買つてゐますが、ありや、とても駄目ぢやありませんかな。——それに村上さん、あれぢ

や全く骨が折れる。實は、先刻一寸戸口のどこまで行つて五分間ばかり拜見しましたがね。あなたの教へ方は、あれぢや、なか／＼骨が折れる。——」

「熊吉の父親、——ありや又熊吉以上の白痴です。は、は、は、先頃中、よく學校へ怒鳴りこんだりなごしたものだ……」

村上先生はひごく侮辱されたやうに感じた。彼は、火鉢の火のかげに浮かんだ校長の赤い脂切つた顔を鋭く睨むやうにしながら、むつとした調子で云つた。

「しかし、親の身になりや無理もないと思ひます。」

「そりや成程、低能だからつてそのまゝにおく事の出來ないのは親としての情です。又受持の教師としての情でもありません。教師は或意味で親同然、いや親以上なのです。だからね、級中の子供を平等に發達させて行き度い。これが受持教師の情であり、又小學教育の

要旨もそこにあるのですが、な、しかし、いづれの社會にせよ、優勝劣敗といふ事がある。どうも平等にやいかない。劣者弱者は、どうも仕方がない。――

「そりやさうです。」と村上先生は、説明口調になつて、諄々として説き出した。校長の言葉を横合から搔きこむやうにした。もうすつかり暗くなつてゐるので、彼の顔付はよくわからなかつた。たゞ、暗い中で、二つの眼の底深く、きら／＼と光るのだけが見えた。その言葉には、再び抑へがなくなつた興奮の調子があつた。そりやさうです。優勝劣敗の法則は、どうする事も出来ません。劣者弱者は、ふみにじられて滅びて了ふばかりです。そんな事は、わかりきつた事です。よ、何も校長さんの御説明を俟たないまでも、わかりきつた事は、わかりきつた事です。さういつて、彼は肩をゆすつて、大きな口を開いて、しわがれた妙な聲で、は、は、と笑つた。

あきらかに、
せよ、
あきらかに、
せよ、

「ですから――」かういひかけたが、校長は、村上先生の興奮した調子を氣づかふやうにして、あごを口の中に消した。

「そりやさうに違ありません。弱い奴、いくぢの無い奴は、どんなに腕（て）いても、叫んでも、仕方ありません。強い奴のために、へしつぶされて、ぐうとも云へずにくたばつて了ふ――それが弱者の運命です。そんな事、私にもよくわかつてゐます。しかし、いくらわかつてゐても、へえさうですかと云つて、あきらめられるでせうか。弱者に、だつて意地もあります。精神もあります……。お前は弱者だから滅びて了へ！それが當然だ……。こゝまで云つて、どうしたのか。突然村上先生の聲は、涙聲に變つた。お前は駄目だから、あきらめろ！さう云はれて、それであきらめられますか。熊吉は馬鹿です。低能兒です。けれど、本氣にやる氣はあるんです……。あるんです……。あるんです……。とう／＼村上先生は、卓の上に突伏して、嗚咽しはじめ

誠の精神をあらわす

* 文學者。慶應義塾大學修學。

清和の道を行き起す

た。

時計がゆつくりと六時を打つた。(郷愁)

二三

苦行者と蛙

佐藤 春夫

或所に一人の人間がゐた。彼は洞穴の口にある石の上に坐つてゐた。何時から彼がそこに居て、どれだけ長い間そのやうにぢつとして居たかを私は知らない。——とにかくそんな一人の人間が居た。

或時、その人間の眼の下へ一疋の蛙が出て來た。蛙の方では初め彼の目の前に坐つて居る人間には氣がつかかなかつた。それ程その人間はぢつとして居たからである。併し彼の前に坐つて居るのが生きた人間であつたのを蛙が知つた時、蛙は驚いた。

「そこに石のやうに坐つて居るのはごなたですか。蛙はその人間

を見上げてさう言つた。

「私か。私は苦行者だ。」

さう人間が答へた。併し蛙は苦行者といふ言葉をよくは知らなかつた。そこで蛙は重ねて聞いた。

「苦行者？さうしてあなたはそんなにぢつと坐つて一たい何をなさるのです。」

そこで苦行者は再び答へた。

「私はぢつと坐つてゐる。私は私の眼を私自身の世界を幸福にする星の上に置いて、また私は私の心を私自身の地球の核心に据ゑて。私はかうして私の宇宙の天體と地球との運行を一心に調節してゐる……」

「謎のやうなことは仰しやらずに。」と、蛙は苦行者の言葉を遮つた。「どうぞ無學な蛙にもわかるやうに仰しやつて下さい。要するにあ

なたは何のためになんかそんなことをなさるのです。

「一口に言へば」と苦行者が答へた。私は神様のお心遣不死を求めて居るのだ。瞬

間と永遠とを一つにしようとしてゐるのだ。」

時を待つてゐるさう聞いて蛙は躍り上つた。

「おゝ！このお方こそ私の捜してゐた先生だ。噂に聞いたあのお方だ。先生どうぞ私を先生のお弟子にして下さい。」

それから蛙は持前の雄辯で彼の身の上と彼が苦行者の弟子になつた理由を説明した。これによるとこの蛙はもこイソツフ物語のなかの古沼の蛙の一人であつた。その時彼の故郷である古沼では大變な騒動が起つて居た。その古沼の蛙たちは、彼等人間物類の怨望を再生させようとする自身を統治するに足るやうな強い立派な王様を彼等自身以外に欲しいと神様に御願ひをしたのが因で、神様は最初に王様として木の丸太を下さつただけけれども、もつと強い立派な働のある王

様をこゝ蛙たちが重ねて願つた時には神様は怖しい鱈をその古沼の王様として授けて下さつた。鱈は位に即くと同時に、手あたり次第に蛙を喰殺し始めた。そこで蛙たちの或者は神様を呪ひ、或者は新しい王に對して一揆を企てて居た。多くの蛙たちは彼の父や母や妻や子を鱈に喰はれた。

「かうして」と苦行者の前の蛙は言つた。私は多くの死を見ました。また我勝ちに鱈の口から逃れようとして争つてゐる同類の淺ましさをも見ました。さうして私は世の中を悲しいものだと見て取りました。だからある夜その沼から遁れ出して、水を遡つて遠い旅をつづけました。私はその途中で先生のお噂を承つて、その時からどうかして先生のお弟子になりたいと思つて居たのです。先生どうぞ私を先生のお弟子にして下さい。」

「ごにもかくにも此處に私と一緒に居ろ。」

苦行者は蛙にさう答へた。かくして蛙は苦行者の弟子になつた。蛙は先生の前に兩手を突いて坐つた。彼等は互に向ひ合つて坐つた。彼等はたゞ黙つてゐた。日の光と月の光とが上から交、彼等を照らした。また時には闇が彼等をすつぽりと裏んだ。さうしてそんな時には近くの樹の梢に梟フクロウが來て啼いた。その度毎に蛙は怖しさに身慄ひをした。けれども我慢をして蛙は黙つてゐた。蛙の身のまはりには苔の美しい花が咲き、それが散り、また咲いて、また散つた。その青い苔は蛙の體のまはりに擴つた。蛙の坐つてゐる足もそこから盛り上つて來た。とうとう苔は蛙の體の上にも生えて來た。蛙は苔のために兩蛙のやうに青くなつた。けれども我慢をして蛙はぢつとしてゐた。併し或朝のことであつた。
 先生！「蛙が叫んだ。先生、私はもう先生の弟子はいやになりました。」

そこで苦行者が言ふのには、
 「それはまたどういふわけだ。」
 そこで蛙が答へた。

「私は私の故郷へ歸りたくなつたのです。あの古沼が懐かしいのです。私は私共の仲間が今どうしてゐるかが知りたいのです。友だちが戀しく、氣にかゝるのです。それに仲間のあの怖しい騒さわぎを打ちすてて、自分一人がこんなところに逃げて來てゐるのが自分自身で恥づかしいのです。私は今の私が、私の仲間に對して何の仕事をも盡くしてゐなかつたことに、今氣がついたからです。」

そこで苦行者が言ふには、
 「お前はお前の仲間ではない。但しお前自身だ。」
 「それなら先生、蛙が重ねて反問した。
 「私は私自身のために何の仕事をしてゐるでせう。」

そこで苦行者が重ねて言ふには、
 我々は目に見えては何もしない。併し我々は目には見えない仕事をする。ちやうど我々の幸福も我々の報酬も他の人のそれ等のものやうに目には見えてゐないと同じことだ。お前は、お前自身の中にあるお前の仲間を見よ。お前の仲間にあるお前を暫く見るな。またお前自身の中にある世界を見つめよ。世界の中にあるお前を暫く忘れよ。悞れるな。たゞ暫くである。さうして結局は同じことである。」

先生の言葉は解らうとすれば高遠だ。ちやうど無いものを捜し出さうとするのにも似てゐる。」

さう言ひ放つた次の一瞬間に、蛙はもう苦行者の前には居なかつた。何故かといふに、その時蛙は昂然として後の脚で躍り上つたからである。

苦行者
 心は直る
 可貴なる
 現石、平崎主義

退
 切
 一筆

蛙は石の上から下りると、やがて水の流に沿うて以前遡つたところのある道をかへつて行つた。さうして永い旅の後に彼は再び彼の故郷である古沼へ歸りついた。併し彼が再び古沼に來たころには、彼の考は又變つてゐた。彼はもう一度やはり苦行者のところへ、もこの先生のところへ行かうと思ひ返した。彼は流をだん／＼と下つて來て、古沼を一目見た時に古沼は、そのいゝわるいにかゝはらず彼の本來の氣質には決して向かないことに氣づかずには居られなかつたのであらう。さうして苦行者の教へたやうな物の考へ方が、その時彼にこつて解りやすいものになつて來たのであらう。それともつこはつきりとした理由があつたか、私はそれに就いてはよく知らない。何にせよ、せつかく遠いところを故郷の古沼まで歸つて來た蛙が、その同じ遠い路を直ぐさま取つて返して、再び苦行者の石の上に來たことは事實である。

苦行者はまだ生きてゐた。生きて、もとのさほり石の上に坐つてゐた。その苦行者の目の下に再び来て坐つた時に、蛙は言った。

「先生、私をどうぞもう一度先生の弟子にして下さい。」
併し、苦行者はもう何も言はなかつた。たゞ無表情な顔で頷いた。

かうして蛙は再び苦行者の前に兩手を突いて坐つた。彼等は互に向ひ合つて坐つた。彼等はたゞ黙つてゐた。蛙はちつと彼の先生の瞳を凝視した。——蛙はそれを彼自身の世界を幸福にする星と信じたからである。日の光と月の光とが上から交、彼等を照らした。又時には闇が彼等をすつほりと裏んだ。さうしてそんな時には近くの樹の下枝に鼻が来て啼いた。けれども蛙はもう身慄ひはしなかつた。蛙の身のまはりには苔の美しい花が咲き、それが散り、また咲いて、また散つた。苔はもう花が咲かなくなつて、その古い苔は枯れて新しい苔が生え變つた。蛙の體の上に新しく生えた苔にも花が

咲いた。それほゞ長い間、それほゞぢつとして蛙は坐つてゐたからである。蛙はもう苔の花のことなどは忘れてゐた。といふのは、蛙は先生の瞳をばかり見つめて居たからである。さうして彼等ほゞとよりいつも唯黙つてゐた。併し或夕方であつた。

「先生！」と蛙は叫んだ。先生は今どこに行かれるのです。今まで私が私の星として見つめて居た先生の瞳はもう見えなくなりまして。先生のお姿は今消えて行きます。」

併し苦行者はたゞ黙つてゐた。

「先生、何とか仰しやつて下さい。私を安心させて下さい。」
その時或聲があつて言つた。その聲は空を渉るそよ風よりも微かだ、長い間己の聲をも他の聲をも聞かなかつた蛙の耳にだけこぎれゝに、併しはつきりと聞くことが出来た。聲は言つた。

「蛙よ、私の弟子よ。安心せよ。今お前は悟る、お前の目から私が消え

る時に。私の目にはお前はもう疾くに消えてゐる。それ故に、お前自身もまた私が消去することを恐れるな。本來影であるところの我々は影の世界に入る時には消去する。併し、その時我々はどこにでもいつまでもある。ちやうど月の照らす光が、どこにでもいつまでもあり、しかもそれは目には見えるけれども手に掬ふことは出来ず、手に掬ふすべはないけれども確にあるやうに。

ひゞきのない聲がさう語つたちやうどその時、深くなり行く夕闇の中に、そのために光を増した月かげは、鬱蒼とした樹々の葉の間から洩れて、その石の上に光が射した。さうして、月はその石の上には唯苔ばかりがあるのを見た。潺湲たる溪流のひゞきが静寂を語つてゐる。(藝術家の喜び)

二四 徒然草四題

吉田 兼好

姓は卜部。洛外吉田に居りしに、より吉田と稱す。

す。文才あり、和歌をよくす。正平五年歿、年六十九。山城國宇治郡醍醐寺の邊。

栗栖野

神無月のころ栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入るこゝ侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るゝ、笥のしづくならでは、つゆ音なふものなし。関伽棚に菊紅葉など折りちらしたるさすがに住む人のあればなるべし。かくてもあらはれけるよこあはれに見るほごに、かなたの庭に、大きな柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しこさめて、この木なからましかばこ覚えしか。

水車

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられむこて、大井の土民に仰せて水車を作らせられけり。多くのあしを賜ひて、數日にいとなみ出して、かけたたりけるに、大方めぐらざりければ、こかくなほしけ

れども遂にまはらで徒に立てりけり。さて宇治の里人を召してこ
 しらへさせられければやすらかに
 ゆひてゆひて参らせたりけるが思ふやう
 にめぐりて水を汲入るゝ事結めめでた
 かりけり。よろづにその道を知れる
 ものはやむやむごとなきものなり。

もろ矢

ある人弓射ることを習ふにもろ
 矢射るを手挿みて的に向ふ。師のいはく
 「初心の人二つの矢を持つことなか
 れ。後の矢をたのみて初の矢になほ
 ざりの心あり。毎度たゞ得失なく、こ
 の一矢に定むべしと思へ。」といふ。僅かに二つの矢師の前にて一つ



古版徒然草挿畫

徒然草の巻

をおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへど
 も師これを知る。この戒萬事にわたるべし。
 道を學する人夕には朝あらむことを思ひ朝には夕あらむこと
 を思ひて重ねて懇に修せむことを期す。いはむや一刹那のうちに
 おいて懈怠の心あることを知らむや。何ぞたゞ今の一念において
 たゞちにするここの甚だ難き。

高名の木のぼり

高名の木のぼりといひし男人をオキテ掬現てて高き木にのぼせて梢を
 伐らせしにいと危く見えし程はいふ事もなく下るゝ時に軒だ
 けばかりになりてあやまちすな心して下りよ。ことばをかけ侍
 りしをかばかりになりては跳び下るゝも下りなむ。いかにかくは
 いふぞ。と申し侍りしかばその事に候。目くるめき枝危きあやほごは、お
 のれが恐れ侍れば申さず。過はやすき所になりて必ず仕ることに

候。いふあやしき下^{ノク}瀾^{ナレ}なれども、聖人のいましめにかなへり。

二五 鞭打つ者鞭打たる者

吉田 絃二郎

鞭打たる、苦痛は、それが私たちの生活をより善く、より強いものとなす時限りもなく、貴い価値を持つてゐる。

愛によりて與へらるゝ鞭の苦痛に限りもない価値が潜んでゐることは言ふまでもないことであるが、だこへ憎によりて與へられた鞭の苦痛といへども、自分をより尊く、より善く、より強きものとなさしめるに価値ある場合が少くはない。憎が眞剣である限りは。

鞭打つといふことは鞭打つ人の生活にとりてよりは鞭打たる人の生活にとりて多くの意義を持つてゐる。私たちが最初から

*
名は源二郎。早
稻田大學講師。

鞭打つ人の生活にとりては、鞭打たる人の生活にとりて多くの意義を持つてゐる。

完全な人間でない限り、鞭打たれるといふことは呪ふべきことではない。それは悲しい、苦しい事實には違ないが。

鞭打たる、苦痛に誰が泣かないで居られよう。鞭の痛さを知ればこそ、鞭打たる、こころが意義あるものとなつて来る。

鞭の痛さを何かにまぎらして忘れようとするのは臆病である。どこまでも鞭の痛さを痛さとして味ははなければならぬ。

強い人間となることは、鞭の痛さを避けようとする者には不可能である。どこまでも強くなれ。そしてどのやうな残忍な鞭にも、ま

ごもに向つて鞭の苦痛を味ははなければならぬ。鞭は私たちがより善き人間とする。けれどもより強き人間でなければ、鞭に耐へる

ことは出来ない。

私たちは與へられる鞭の苦痛を知ると同時に、尊いものであることを知つてゐる。けれども最後まで耐へ忍ぶには、往々にして餘

りに弱い。弱きものはより悪しきものとなり、強き者はより善きものとなる。善悪には二元はない。鞭を忍ぶと忍ばないとの差のみである。
W. I. CANON

鞭打たるゝものにとつては、一つの軽い打撃も、より重き打撃と思はれる。鞭打つ者にとつては、重き打撃も、餘りに軽きものと思はれるであらう。

鞭打つ打撃の餘りに重きを憂へる者は愛の人であり鞭打たる打撃の餘りに軽きを感じずる者は、ほんたうに自分を観ることの出来る敬虔な生活者である。

「俺は今日は何にも與へるものを持たない。」と言つて、乞丐あかの手を強く握つたツルゲーニエフの心は美しい。しかし、鞭打たるゝものよりも、より以上に深い悲と愛とをもつてその友を鞭打つ者も、尊い人格ではないか。

Turgenjew

ロシアの小
説家。一八
八三—一八
八三

鞭打たれた痛さを忘れるものは愚人である。鞭打つことの辛さを忘れるものは冷酷な人間である。

鞭打たれたものは終夜寐ることは出来ない。彼は轉々として床上に悶える。鞭打つたものも亦終夜寐てはならぬ。自分の與へた鞭が友の心を傷つたとするならば、鞭打つた彼は自分の心を傷るか、でなければ友の心を築き直してやらなければならぬ。鞭打つ者には當然それだけの義務がある。

鞭を持つてゐる多くの人々は言ふ、自分は正しいことのために鞭打つた。とかくして彼は弱き不幸な悪人を鞭打つてすやくと眠る。彼は繰返して言ふ、正しきことのために、鞭打つた。と。そして彼は眠る。

彼等は誤つてゐる。鞭打たれたものの傷れた肉と傷れた心とは、「正しきこと」のために慰められはしない。癒されはしない。弱い人々

尋常小學國語讀本教材研究(のそ三)新出漢字一覽表

Table with 11 columns and 11 rows, containing Japanese characters and their corresponding Chinese meanings. The columns are numbered 1-11 and the rows are numbered 1-11. The table lists characters like '森立宮店賣', '去倭飯卵丸湯拾', '櫻炭燒', '留達后到遺舊(旧)坪', '籍版忍悉刷庫' and their meanings.

新出漢字 (三のり) 辭書圖譜辭本

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十	卷十一	卷十二	卷十三	卷十四	卷十五	卷十六	卷十七	卷十八	卷十九	卷二十
...

大正十三年十月十九日印 刷
 大正十三年十月二十二日發 行
 大正十四年一月十七日訂正印刷
 大正十四年一月二十日訂正發行



發行所

東京市神田錦町一丁目
 (振替東京四九九一番)

株式會社 明治書院
 電話 大手五八四五番

編者 垣内松三

發行者 株式會社 明治書院

印刷者 綾部喜久二

定價	卷一、二、各金四拾七錢	卷三、四、各金四拾八錢	卷五、六、各金四拾九錢
大臨	卷一、二、各金八拾錢	卷三、四、各金八拾一錢	卷五、六、各金八拾二錢
正時	卷一、二、各金八拾錢	卷三、四、各金八拾一錢	卷五、六、各金八拾二錢
年度	卷一、二、各金八拾錢	卷三、四、各金八拾一錢	卷五、六、各金八拾二錢
價	卷一、二、各金五拾貳錢	卷三、四、各金五拾參錢	卷五、六、各金五拾肆錢

山縣政司郡秋中村字大内原
 名義武義撰

山口縣師範學校

三年一組

云兼次義



上

下

中

丁
丁
丁
丁
丁
丁
丁
丁
丁
丁

小
縣
小
縣



広島大学図書

2000301851

